

令和2年度 教員個人評価の集計・分析報告書

佐賀大学工学部

評価委員会

令和3年12月

目次

令和2年度教員個人評価について	1
1. 教員個人評価の実施状況	3
1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など	3
1.2. 教員個人評価の実施概要	3
1.2.1. 評価組織	3
1.2.2. 実施経緯、内容、方法等	3
1.2.3. 添付資料	5
2. 理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となつて行った教育研究活動等	6
3. 評価領域別の集計及び分析	8
3.1. 教育の領域	8
3.1.1. 講義担当等に関する事項	8
3.1.2. 教育改善に関する事項	10
3.1.3. 教育研修・FDに関する事項	19
3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項	22
3.1.5. 学生の受賞等	23
3.2. 研究の領域	25
3.2.1. 著書、論文等の発表実績	25
3.2.2. 共同研究などに関する活動実績	27
3.2.3. 受賞等の実績	29
3.3. 国際・社会貢献の領域	30
3.3.1. 国際交流実績	30
3.3.2. 社会貢献実績	32
3.4. 組織運営の領域	36
4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価	39
4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度	39
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム	41
4.3. 評価委員からのコメント	48
令和2年度理工学部評価委員会委員	53

令和2年度教員個人評価について

理工学部における教員の個人評価は、各教員から提出された個人目標申告書、活動実績報告書及び自己点検・評価書に基づき、理工学部評価委員会の下に置かれた理工学部個人評価実施委員会において行うこととされ、本報告書はその令和2年度分を取りまとめたものです。

教員自己点検・評価は、まず各教員が教育、研究、国際交流・社会貢献および組織運営の4つの観点から5段階で評価を行います。次に個人評価実施委員会が、教員の資質向上と諸活動の活性化、ならびに本学および理工学部と理工学研究科・工学系研究科の目標達成に向けた活動という観点から個人評価点の妥当性を点検します。

各部門の詳細は本編に記載されていますので、ここでは理工学部全体について総括します。

本年度はコロナ禍により例年とは大きく異なった1年となりましたが、全ての教員が回答していることにより、各教員が4つの観点を意識して積極的に日々の業務を実施していることが伺えます。評価の4つの観点全てに対して大きな成果を上げることが期待されますが、特に教育と研究は大学の使命であり、高いレベルが求められています。

教育活動では、コロナ禍により前学期は急遽ほぼ全授業をオンラインで実施することになりました。このことは、昨年度の学部・大学院改組の過渡期であることや、教員の減少などと相まって、教育に対する極めて大きな負担となりました。しかしながら、このような困難な状況にありながらも、各教員の創意工夫と試行錯誤によりこの難局を無事乗り切ることができたことは、教員をはじめとする本学部構成員の実力の高さが伺えます。そして、アフターコロナという新しい時代の教育方法の基礎を作ることができました。また、教育の国際化を推進するものとして、環境・エネルギー科学グローバルプログラム(PPGA)および大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)に加えて、環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム(EPGA)を新しくスタートさせるなど、グローバル化を見据えた教育プログラムを提供しています。さらに、きめ細かな研究指導が行われており、18件の学生受賞に結びついています。学生受賞の件数自体は、昨年度の1/3ほどになっていますが、学生が大学に来ることができない、学会自体が開催されないという状況にあっては十分な成果だと考えています。

研究においても同様に、厳しい状況の中にあっても各教員が高いアクティビティを維持し、多くの学術論文の出版、50件以上の共同研究の実施、13件の受賞という良好な成果を上げています。

国際交流では特にコロナ禍の影響が大きく、組織的な取り組みである国際パートナーシップ教育プログラムの実施は2件にとどまりました。しかしながら、個別には、オンラインを活用した国際学会への参加や留学生の受け入れを行っており、それぞれの教員ができることを着実に実施しています。

社会貢献では、高大連携による地域教育への参画、各種自治体の審議会・委員会構成員としての地域貢献、学会役員としての学会活性化への取り組みなど、例年同様の140件を超える

取組みにより佐賀県を中心として広く社会に貢献しています。

組織運営は、全教員が日々の業務に真摯に取り組むとともに、多くの教員が学長補佐や他部局・センターの運営委員・併任教員を務めることにより本学部のみならず全学の運営にも大きく貢献しています。

理工学部では、全てのステークホルダーの皆様から頼りにされる存在になるということをお大義としています。本報告書に示されていますように、この大義の実現に向けて各教員はそれぞれの自由闊達な発想によりPDCAサイクルを回し、改善を続けています。しかしながら、教員数の減少に伴う教育・研究への影響は小さくなく、これからもステークホルダーの皆様に価値を提供し続けていけるよう人員充実を大学執行部に訴えていきます。そして、各教員には今後もそれぞれの幸せと佐賀大学の発展に向けて高いアクティビティで活躍してほしいと願っています。これからも教員一丸となって取り組みますので、皆様のご指導・ご鞭撻ならびにご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

理工学部長
豊田 一彦

1. 教員個人評価の実施状況

1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など

理工学部所属の教員（教授、准教授、講師、助教）に対して、別紙様式1～4に関して教員個人評価を実施し、下記表の全員から回答を得た（回答率100%）。（令和3年10月1日現在）

部 門	回答教員数	回答率(%)
数理	9	100
情報	16	100
化学	22	100
物理学	12	100
機械工学	25	100
電気電子工学	24	100
都市工学	20	100
理工学部（合計）	128	100

1.2. 教員個人評価の実施概要

1.2.1. 評価組織

理工学部評価委員会ならびに理工学部個人評価実施委員会

1.2.2. 実施経緯、内容、方法等

- ① 令和3年2月1日
 - 学部長は、退職（予定）教員に対し、令和2年度活動の自己点検・評価を行い、別紙様式1、3、4を令和3年3月31日までに提出するように依頼した。
- ② 令和3年2月24日
 - 学部長は、全教員に対し、教員活動データベース及びポートフォリオシステムについて、それぞれ、令和3年3月31日までに入力するように依頼した。
- ③ 令和3年3月10日
 - 学部長は、全教員に対し、令和2年度活動の自己点検・評価を行い、別紙様式1、3、4を令和3年4月30日までに提出するように依頼した。
同時に、令和3年度の各様式もメールにて送付し、別紙様式1（令和3年度活動の「個人目標申告書」）の作成・提出も併せて依頼した。
- ④ 令和3年4月7日
 - 教員活動データベースシステム全学管理責任者から、全教員に対し、教員活動データベースへの入力について依頼があった。
- ⑤ 令和3年5月12日 第1回理工学部評価委員会開催

- 令和2年度教員個人評価のスケジュールを決定した。
 - 令和2年度教員個人評価集計と分析報告書（様式）について決定した。
 - 理工学部個人評価用集計シート及び理工学部・理工学研究科・工学系研究科個人業績集約方法の様式を決定した。
 - 令和3年度理工学部自己点検・評価スケジュールを決定した。
- ⑥ 令和3年5月18日
- 副学部長(評価担当)は、個人評価実施委員(各部門長)に、各教員から提出された令和2年度の各別紙様式(1。3。4)、「個人評価用集計シート」、「個人評価用集計ツール」、「個人業績集約の方法」、「令和2年度教員個人評価(部門)集計と分析報告書」の様式を送付し、「令和2年度教員個人評価集計と分析(部門)」の作成を依頼した。(USBメモリーを手渡した。)
- ⑦ 令和3年5月18日
- 学部長は、個人評価実施委員に、令和2年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行い、令和2年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)への記載を依頼した。
- ⑧ 令和3年6月30日
- 個人評価実施委員は、令和2年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4、別紙様式1・3も含む)を学部長へ報告した。
- ⑨ 令和3年9月15日
- 個人評価実施委員は、「令和2年度教員個人評価集計と分析(部門)」を学部長へ報告した。
- ⑩ 令和3年9月28日～10月26日
- 学部長は、令和2年度活動の「個人目標申告書」(別紙様式1)、教員活動データベース、ポートフォリオ学習支援統合システム評価基礎情報、及び「個人評価結果」(別紙様式3)に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、個人評価実施委員が記載した令和2年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)の評価内容を確認し、必要があれば評価結果の補足等及び学部長コメントを記載した。なお、学部長は、審査にあたり、審査の公平性を確保するために、必要に応じ、他の職員から意見を求めた。また、学部長は、必要に応じ、評価内容について、当該教員から意見を聴取した。
- ⑪ 令和3年10月29日
- 副学部長(評価担当)は、理工学部の令和2年度教員個人評価集計・分析報告書(案)を取り纏めた。
- ⑫ 令和3年11月12日

- 学部長は、令和2年度活動の「個人評価結果」(別紙様式4)および「令和2年度教員個人評価集計と分析(部門)」を、当該教員に通知した。
 - 各教員は個人評価の結果に対して異議がある場合は、通知後2週間以内に異議申立書(様式任意)を学部長に提出することとなった。
- ⑬ 令和3年11月24日
- 学部長は、理工学部の教員個人評価集計・分析報告書を作成し、理工学部評価委員会に対し、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を付託した。
- ⑭ 令和3年12月1日
- 評価委員会は、本学部の教員個人評価結果の総合的な検討を行い、同報告書を承認し、その結果を学部長に報告した。
- ⑮ 令和3年12月下旬
- 学部長は、「教員個人評価集計・分析報告書」を添えて理工学部教員の個人評価結果を学長に報告した。

1.2.3. 添付資料

佐賀大学大学評価の実施に関する規則(平成17年3月1日制定)

佐賀大学理工学部における教員の個人評価に関する実施基準

「理工学部における個人達成目標の指針」(教員用)

個人目標申告書(別紙様式1)

教員報告書(別紙様式2)：理工学部教員活動実績年次報告書(推奨様式)に読み替え

自己点検・評価書(別紙様式3)

個人評価結果(別紙様式4)

2. 理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となつて行った教育研究活動等

理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となつて行った教育研究活動等を以下に示す。

- 理工学部国際パートナーシップ教育プログラム（平成 16 年度より）
 - ・ 令和 2 年度は 3 件実施、パートナー機関は、延世大学(大韓民国)、武漢大学(中国)、ランブンマンクラット大学（インドネシア）、ハサヌディン大学（インドネシア）、西ヤンゴン工科大学(ミャンマー)、ジャハンギルナガル大学(バングラデシュ)で、物理学部門、電気電子工学部門、都市工学部門の教員が参画した。
- 環境・エネルギー科学グローバルプログラム（PPGA）（平成 25 年 10 月より）
 - ・ 外国人留学生と日本人学生が共学し、世界的な環境とエネルギー問題の解決に関する講義などの教育カリキュラムを全て英語で実施するプログラムである。
 - ・ 前期課程プログラムは、令和 2 年度をもって当初計画のプログラム期間が終了した。その間、循環物質化学専攻、機械システム工学専攻、電気電子工学専攻、都市工学専攻、先端融合工学専攻の教員が担当した。また、博士後期課程プログラムは、システム創成科学専攻の化学、機械、電気電子、都市、先端融合分野の教員が参画した。
- 環境・エネルギー・健康科学グローバル教育プログラム(EPGA)(令和 2 年 10 月より)
 - ・ 科学技術の向上には、環境・エネルギー保全の観点からの取り組みに加え、健康科学の普及も必要との考えをもとに、これまで外国人留学生と日本人学生が共学し、一定の成果を上げてきた PPGA をさらに継続深化させた教育カリキュラムとして、令和 2 年 10 月（前期および後期課程）にスタートさせた。
 - ・ 前期課程プログラムは、機能材料化学コース、機械エネルギー工学コース、機械システム工学コース、電気電子工学コース、都市基盤工学コース、建築環境デザインコース、生体医工学コース、健康機能分子化学コースの教員が担当した。また、博士後期課程プログラムは、工学系研究科システム創成科学専攻の化学、機械、電気電子、都市、先端融合分野の教員が参画した。
- 大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)
 - ・ 佐賀大学大学院工学系研究科博士後期課程の教育プログラムで、学术交流協定に基づいて実施されている国際共同研究や国際共同教育を強化し、佐賀大学特有の実質的な国際活動を発展させるために、佐賀大学独自に奨学金制度（佐賀大学奨学金留学制度）を設け、アジア諸国から外国人留学生を博士後期課程に受入れるものである。工学系研究科博士後期課程担当の教員が参画。
- 学生の留年率、就職率、進学率の改善に対する取り組み
- 佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）（平成 13 年度より）
 - ・ 佐賀大学の交流協定校に所属する学生を対象とした短期留学プログラムで、日本語

コース (SPACE-J : 学部生および修士課程の院生が対象) と、英語コース (SPACE-E : 学部生のみが対象) がある。佐賀大学での学習や研究、また日本人学生や地域の人々とのふれあいを通じて、日本社会についての知識や理解を深める。学生の受け入れや講義、自由研究を担当。令和 2 年度は SPACE 関連で 8 名の受け入れ予定であったものの、コロナ禍のため日本への入国ができていない。そのため、Web 会議システムを用いたにライブ講義を一部実施している。

- 高大連携事業
 - ・ 令和 2 年度の高等学校とのジョイントセミナーは、コロナ禍のため、すべてオンラインでの対応となったものの、各部門の教員が各高等学校の要請に応じて、ミニ講義、模擬講義、大学・学部・学科の紹介を実施した。
- 佐賀県立致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業
 - ・ 研究者招聘講座および理系ガイダンス講座等を連携して実施した。一部を除き、令和 2 年度はコロナ禍のため、オンライン会議システムを用いての実施となっている。
- 環境美化エコ活動
 - ・ 光熱水量使用料金の抑制：平成 18 年度から使用量に応じて負担する受益者負担制度を導入、夏季および冬季の空調交互運転、エアコン、照明器具の更新に当たっては省エネタイプに切り替え、夏季および冬季の節電パトロールを実施した。

3. 評価領域別の集計及び分析

3.1. 教育の領域

3.1.1. 講義担当等に関する事項

表 3.1 に教員の担当科目数（学部、修士）、担当コマ数（半期当り換算）、卒業研究指導学生数、修士特別研究指導学生数、博士研究指導学生数（主指導）の平均値を示している。

表 3.1 教員 1 人当たりの講義担当、指導学生数

部 門	職 位	学 部 (教養教育科目を含む)			大 学 院			
		担当科目数/ 教員	担当コマ数	卒研学生指導数	担当科目数/ 教員	担当コマ数	修士学生指導数	博士学生指導数
数理	教 授	5.33	5.17	4.67	2.00	1.38	1.67	0.33
	准教授 (含講師)	5.33	5.17	4.67	2.00	1.38	1.67	0.16
情報	教 授	6.86	5.49	4.43	2.29	2.76	2.43	0.29
	准教授 (含講師)	6.00	5.24	3.83	2.67	1.81	3.50	0.57
	助 教	1.67	2.00	1.67	0.00	0.00	0.00	0.00
化学	教 授	10.73	9.57	4.73	8.18	4.14	4.18	0.55
	准教授	8.14	7.85	4.71	4.14	3.89	3.57	0.00
	助 教	7.67	6.87	2.67	1.00	0.69	1.00	0.00
物理学	教 授	7.20	7.46	3.60	2.20	3.10	1.80	0.20
	准教授	5.43	5.61	2.86	1.71	1.22	2.29	0.0
機械工学	教 授	4.56	4.16	3.11	2.56	2.05	4.11	1.00
	准教授 (含講師)	5.69	5.33	2.92	3.85	2.07	3.15	0.23
	助 教	2.00	3.38	1.00	0.33	0.02	0.33	0.00
電気電子工学	教 授	3.44	2.82	3.89	4.33	2.92	4.67	0.44
	准教授 (含講師)	5.46	7.50	3.85	3.38	2.75	2.69	0.08
	助 教	4.50	6.03	1.00	0.50	0.03	1.00	0.00
都市工学	教 授	6.89	6.32	5.11	2.44	2.10	3.00	1.67
	准教授 (含講師)	6.40	4.96	5.20	3.20	2.06	3.00	0.20
	助 教	4.00	6.00	5.00	0.00	0.00	0.00	0.00

受講生数は教務システムに登録された履修者数

授業担当コマ数は、半期当りに換算する。（通年 1 コマの科目は 2 コマとする。） 1 科目を複数教員で担当する場合は、実働時間とする。

【数理部門】

- 教授と准教授は概ね同数の科目を担当している。卒業研究や修士課程の主任指導に関しては、教授の方が准教授よりもやや多くの学生を担当しているが、これには学生の選択・希望が反映しているものと考えられる。
- 博士後期課程の主旨導の有資格者として博士課程学生を指導している准教授もいる。

【情報部門】

- 教授は准教授よりも多くの科目を担当している。また、博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を指導している。准教授の中にも、博士後期課程の主旨導の有資格者として指導を行っている教員がいる。
- 助教は演習や実験の指導を担当している。通常の授業科目を担当している助教もいる。
- 懸念事項となっていた職種間の教育負担の隔たりに改善が見られる。大学院における修士および博士学生主任指導における教授と准教授の差はなくなっており、学部・大学院ともに、担当科目・コマ数の差も縮まっており、教育負担の均等化が進んでいる。

【化学部門】

- 教授は学士課程と博士前期課程をあわせて年間 17 科目程度を担当している。准教授も学士課程と博士前期課程をあわせて年間 12 科目程度であり、コマ数でも概ね同程度の講義を担当している。近年、これらの担当科目数とコマ数は高い数値となっており、教員の教育負担が過度になっていることがわかる。教授・准教授は、学生実験科目も担当しているので授業のエフォートは大きい。助教は、教授や准教授に比べると授業科目の担当数が少ないが、主に実験及び演習科目の指導を担当するとともに、主要授業科目以外の科目を担当している。
- 博士前期課程の研究指導に関しては、教授と准教授はほぼ同数（約 4 人）の学生を指導している。助教は、4 年次卒業研究着手時の配属学生数が教授や准教授よりも少ないので、学士課程の指導学生数は少ない。さらに、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習や生活相談など）を行っていることが報告されている。博士後期課程に関しては、主旨導の有資格者の多くは教授であるので、教授が主に博士後期課程学生を指導している。また、副指導教員となって、実質指導を行っている教員もいる。

【物理学部門】

- 平均して教授は准教授よりやや多めの授業を担当し、研究指導学生数は例年はほぼ同等であるが、20年度はやや准教授の担当が多かった。
- 博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を指導している教員がいる。
- 役職者については、負担の軽減をはかる措置を講じているが、実際はあまり軽減されていない。

- 新課程が始まった 2 年目で旧課程との過渡期であるため、理工学科共通専門基礎科目や理工学研究科の新規開講科目などの新しい科目の担当が増加し、全体的に教育負担がましている。コロナウイルス感染拡大による授業の多様化による負担増加も大きかった。

【機械工学部門】

- 講義担当科目数について、学部科目は教授に比べて准教授が若干多く担当しているが、大学院科目は教授および准教授は同じ科目数、コマ数を担当している。卒業研究および大学院の指導学生数について、教授と准教授は概ね同数を担当している。准教授においては、博士後期課程の主旨導を行っている教員もいる。
- 助教は機械工学実験 I・II、機械工作実習 I・II など、実験・実習の指導を担当している。

【電気電子工学部門】

- 准教授は教授よりも学部に関しては多くの科目を担当している。これは、准教授が学生実験の科目と担当しているためである。また、准教授の中に、博士後期課程の主旨導の有資格者として博士学生を指導している教員、副指導教員となって、実質指導を行っている教員がいる。
- 助教は主に実験指導と選択科目を担当している。指導する学生数は平均 1.00 人で前期後期を通じて 6.03 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の学生指導の支援を行っている。

【都市工学部門】

- 教授は、学部、大学院ともに准教授よりも多くの科目を担当している。また、教授と准教授はほぼ同数の卒研学生を、大学院では教授が修士および博士学生ともに准教授よりも多くの教育指導を担当している。さらに、D○合の資格を得た准教授は主任指導教員として、博士学生の指導を行っている。助教は主に実験や製作指導を担当している。
- 指導する学生数は卒業研究（講師以上）で平均 5 人強、修士指導（講師以上）で平均 3 人、博士主任指導（全教授と有資格の准教授）で平均 1.6 人である。前年に比べ、卒研指導数、修士指導数共に増加している。さらに、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っていることが報告されている。

3.1.2. 教育改善に関する事項

教育改善に関し、理工学部各部門の教員は、次のような取り組み、実践を行っている。

【数理部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- オンラインでの指導などを取り入れつつ、修士学生 2 名に修士論文を執筆させた。
(准教授)

- コロナ禍による特殊事情により、メールやMicrosoft Teamsなどで何名かの学生の進路相談を行った。(准教授)
- コロナ禍の為、オンラインでの学生からの質問を受け付けた。(准教授)
- ある授業に関して、オンラインで成績評価までできるように、Moodle にテスト問題を多数作成し、ランダム出題するようにした。(准教授)
- オフィスアワーはZoomを用いてオンラインで実施した。(講師)
- オンライン形式であったため、講義ノートを事前に配布することにより、常に予習と復習ができるようにし、その内容をZoomを利用して解説した。(講師)
- web ページを独自に作り、レポート課題・解答例をアップロードした。(講師)

【情報部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- チューター面談やレポートでの設問を通じ、学生からの意見を収集して改善点を検討(教授)。
- 学生からの相談を随時メールにて実施。新型コロナ対策で対面型の面談は出来ず(教授)。
- 学内進出企業と協力して卒業研究を実施。当該企業の間で共同研究契約を締結(教授)。
- 地元IT企業および佐賀市と協力したイベントの、授業の一環としての取り組み(教授)。
- 地元企業と佐賀県と協力した大学院講義(教授)。
- 改良型ハイフレックス方式を活用した授業改善活動(准教授)。
- プログラミングコンテスト(教授)。

【化学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。令和2年度はコロナ禍のため、多くの講義がオンラインでの実施となり、多くの試行錯誤がなされた。

- コロナ禍のために、急遽、オンライン・オンデマンド講義に対応せざるをえなかった。これらは全く新しい取組ではあったが、コロナ禍にあっても学生に講義を提供することができた。(教授)
- アンケートにおける殆どの設問において全体平均と同等の評価を得ている。単独で担当した科目においては、ほぼ全ての項目において高い評価を得た。複数の科目において、オンデマンド形式にも拘らず、講義内容がわかりやすかった、面白かった、といった意見があった。(教授、准教授)
- 授業に対する学生の評価は非常に高く、授業内容を選別し削減したことが功を奏したようである(教授)
- 多くの講義をオンライン(動画配信)で実施したが、概ね良好な意見であった。またオンライン講義をオンデマンド形式で実施したことで、繰り返し学習できたこと

は教育上効果があった。(教授、准教授)

- 講義をオンデマンドな動画配信形式としたため例年と大きく異なっている。必要に応じて巻き戻し、内容を繰り返し視聴できるなど、自主的に学習することが可能な学生にとっては学習機会が増加したと考えられる。視聴回数は試験前に若干増加し復習の手助けになったと思われる(助教)
- 前学期にたてた目標に沿って、同時中継型でのオンライン講義を行った。例年と講義方法や授業の進め方が全く異なりたいへん苦労が多かったが、学生の履修状況もよく、おおむね順調に講義を進められたのではないかと思われる。一方的に話すだけの講義にならないよう、適当に演習時間を設けて作業させるなどした。また、講義録画やオンラインでの小テストを準備して、十分な復習ができるようにした。(教授)
- コロナ禍で、対面できない学生の質問や相談に丁寧に対応した点は良かった。(教授)

【物理学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- LMS を活用している(教授)。eラーニングを実施した(教授准教授)。
- 時間外学習が可能なようにテキストなど教材を作成し、学生に提供している。(教授)
- グループ学習を取り入れている。(准教授)
- オンラインで毎週学生に小テストを行っている。(准教授)
- 授業用の動画を作成した。(准教授)
- シラバスに自習課題を記載している。さらに、原則として毎回演習を行い、答案を回収し、解答例を配布している。(教授)
- 1年次の共通教育科目で、毎回の授業の後に共同担当で会合を開き、授業の改善について議論している科目がある。(教授、准教授)
- 成績不振者に対して、補習、再試験を行い挽回の機会を与える科目もある。(賛否両論あるため、教員個人に判断は任されている)

【機械工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。令和2年度は、前学期は完全オンライン授業であり、後学期は一部対面授業の措置が取られたため、学期ごとに分けて記述している。

<前学期>

- 教員と学生および学生同士のコミュニケーションをネット上で取りながらすすめるようできたこと
- コロナ禍の影響で全てリモートでの授業を行い、定期試験及び再試験のみ対面で実施した。再試験の結果まで含めた合格率は昨年度より高い値を示している。リモー

トでの講義と演習を効果的に行ったことによる結果であると考えられる。

- コロナ禍の影響で全てリモートでの授業を行い、定期試験及び再試験のみ対面で実施した。そのせいもあったのか、受講者は8名と少なく、3名の放棄者もあったが、リモートでの講義を効果的に行ったことにより、最後まで履修した5名全員が合格した。
- 学生が講義を受講して達成感や満足できる理解度が得られるように、日々の講義に工夫を凝らして教授していく所存である。今期はコロナ禍で講義が遠隔授業になったが、学生が取り組みやすい講義動画とは何かを考え、手書きで説明する様子を収録し、動画を公開したところ概ね良好な感想を持ってくれたようである。
- リモートなので以前よりも細かな点にまで記述した資料を作成した。手元にPCがあるのでPC上でシミュレーションを組み込みながら講義をすすめた。学生からの質問には夜中でも答えるようにした。
- 講義においては、実際の工学的応用例との関連を示すなどして、受講者の授業への関心を喚起するように努めた。
- 重要な項目、曲線を伴う複雑な図形、および通常のテキスト内では省略されがちな内容等については、配布資料やコンピュータを用いて丁寧にわかりやすく講義するよう努めた。
- 演習は前講義の内容についての問題を解かせる。もう一度基礎事項の説明を行うなどして理解を深めるようにした。
- 基本的能力を養うことを主眼とした。
- 各演習や資料等についての質問に対しては、その都度、受講者全員に対し動画配信による説明を行った。
- 中間試験と定期試験後にそれらの解法についての動画配信を行った。
- 講義においては、実際の工学的応用例との関連を示すなどして、受講者の授業への関心を喚起するように努めた。
- 重要な項目、および通常のテキスト内では省略されがちな式の算出や内容等については、コンピュータを用いて丁寧にわかりやすく講義するよう努めた。
- 諸現象を定性的に理解させ、特異現象については、より一層の理解を得るため演習問題を解かせる。
- 演習と各試験に対し、解答例を示すことで学生の理解に再度務めた。
- 講義はオンデマンド（動画配信）型で実施し、テキストの内容をスライドを使用して丁寧な説明を行った。日常生活で用いられている機械への関心を深めることを目的としている。
- オンデマンド（資料配布）型授業で行うとともに、毎回講義後に小テストを行うとともに、中間試験と定期試験をそれぞれ1回実施し、授業の理解力の向上を図った。
- 2020年度前学期は新型コロナウイルス対応のためオンライン授業として実施した。

動画等の授業素材を工夫して、実験を体験した感覚が持てるように配慮した。

- 講義や教科書で得られた知識に留まらず、実験を通しての体験を伴った知識として獲得できるように配慮して各実験テーマが選定されている。
- 自分の考えを要領よく相手に説明できるようになるためにプレゼンテーションの時間が設定した。
- **LiveCampus** を適切に利用して「授業スライドの提供」「追加説明資料」「レポート提出」を可能とすることにより、学内外を問わずネットワーク接続による「資料アクセス」「出席確認」「レポート提出」ができ、いつでも自学自習できるようにした。
- コロナ禍で直接指導できない学生もいたが、**Microsoft Teams** と **Cisco Webex** を用いて、うまく対応できた。
- 実例を上げながら、面白く、分かりやすく授業ができた。予習を促し、授業を円滑に進めるために、シラバスを配布すること授業内容に対する理解を深め、学習効果を高めるために、適宜に演習を課した。
- 今年度・前学期は、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで講義を実施した。オンライン講義では、**Microsoft Teams** を使った。
- 学生の受講環境の違いを配慮し、リアルタイムで参加出来なかった学生に対しては、オンデマンドで講義を受講できるように、資料を準備し、配布した。
- 関連事項の説明や課題の提示を、概説の時間や、オンライン講義のグループワークの際などで行った。
- 実験の際、参考書などを確認しながら、観察結果や実験データをまとめ、互いに検証させ、講義への理解を深めた。
- 提出必須のレポートは、考察・結論の妥当性・独自性を、主に評価した。
- 個別に提示した実験課題に関するプレゼンテーションの実施を、今期は、**Microsoft Teams** 上で行い、オンラインシステムを援用した情報発信能力、コミュニケーション能力を養い、実験の発展的な理解に努めさせた。
- 新型コロナウイルス感染症の影響により、15回の講義のうち、今年度は、2回を対面式での講義、残りはオンライン講義とした。オンライン講義では、**Microsoft Teams** を使った。
- 学生自らが、創意工夫、試行錯誤、問題解決を行なう過程を体験することを最重要視した。
- 工学設計の基礎知識やプレゼンテーション、レポート作成技法を習得させた。
- 班毎の議論を通して、チームワーク力の向上、技術コミュニケーション能力を修得させた。
- 遠隔授業を初めて行ったので、オンデマンド資料を毎回作成した。
- コロナ問題で急遽オンライン授業となったが、授業内容の理解が深まるよう努めた。
- 毎回の講義について、学生意見を **Microsoft Teams** より取った。

- 毎回の講義に関する教材を授業前の日に **Live Campus** よりアップロードした。
- 講義の内容における課題として多くの演習・実習を行った。
- 講義の動画をアップロード後電子メールより各学生に事前連絡した。
- 全ての学生が本科目の要求を満たす学力を身につけられるよう配慮した。
- 全ての学生が本科目の要求を満たす学力を身につけられるよう配慮し、それを達成できたことが、本科目の優れていた点である。
- オンラインでの実施が初めてなので、動画撮影や編集作業には相当骨を折ったが、対面授業と同様の内容を提供できるように試行錯誤した。
- オンライン用のソフトをつかうことで、会議を実施することにより質問には答えやすくなり、結果的にきめ細かい指導ができた面もあったかと思う。
- 実験内容を理解してもらえるように、動画とスライドを駆使して資料を作成した。
- 協同作業が必要な科目なので、オンライン会議機能を多く使用して学生同士で話し合いをしてもらえるよう工夫した。
- オンラインだとどうしても分野が異なる講義を理解するのは難しいので、簡単な実験動画を多く作成した。
- コロナ禍の影響によりリモート授業を実施した。マイクロソフト **Microsoft Teams** を用いるとともに、これまでに作成した資料を活用し、対面授業と同様の内容でリモート授業を推進することができた。
- 講義のオンライン化に努めた。オンデマンドの動画視聴型や、ライブ形式の講義を実施し、従来と変わらない講義の質と量を保証できるように努めた。
- 今期はオンライン授業となり、オンデマンド型で授業を行った。全体的に授業に対する満足度が高く、評価方法が異なるので一概に言えないが成績も高めに出ている。資料配布形式で行ったことに対しても好意見がコメントされている。
- 今期はオンデマンド講義を実施し、講義動画の作成を実施した。**PowerPoint** スライドの作成およびその説明を行い、対面でなくてもしっかりと説明できた。
- 三密を避けるため、オンラインと対面のハイブリッド形式および受講者の入れ替えにて対応した。
- TAによる検図を厳しくした結果、図面の完成度が上がった。

<後学期>

- 遠隔により講義・発表を行い、問題なくこれらを行うことができた。
- コロナ禍の影響でオンデマンドの授業とライブの質疑応答を全てリモートで行ったが、共通科目を担当する教員間で協力して授業に使う資料を作成し、ほとんどの学生がプログラミングの基礎を修得できた。
- 学生が講義を受講して達成感や満足できる理解度が得られるように、日々の講義に工夫を凝らして教授していく所存である。今期はコロナ禍で講義が遠隔授業になったが、学生が取り組みやすい講義動画とは何かを考え、オンデマンド形式の講義動

画を作成したところ概ね良好な感想を持ってくれたようである。

- 確率統計の講義で R を取り入れ モンテカルロシミュレーションを使いながら 理解を深めるようにしたこと。
- 講義においては、実際の工学的応用例との関連を示すなどして、受講者の授業への関心を喚起するように努めた。
- 重要な項目、曲線を伴う複雑な図形、および通常テキスト内では省略されがちな内容等については、配布資料やコンピュータを用いて丁寧にわかりやすく講義するよう努めた。
- オンデマンド（動画配信）型授業を実施し、各回にレポート提出を課した。
- 今年度は、資料を補足する部分にスライドを作成し詳細に説明を行ったが、学生として十分に理解できない面があった。
- 各講義後に課題についてのレポートの提出を課した。
- 2020 年度はオンラインで実施したが、実際の実験を疑似体験できるような動画素材等を充実させることを心掛けた。
- 自分の考えを要領よく相手に説明できるようになるためにプレゼンテーションの時間が設定した。
- 2020 年度はオンライン授業として実施したが、後半のグループ活動まで学生が十分に組み組めたと思う。
- 授業の後半では、地球環境問題の中から自分が興味を持ったトピックスを選ばせ、他学部や他学科の学生も含んだ 15 グループを作った。
- チームワーク力の修得を念頭において、各グループ内で課題について議論させ、共同でプレゼンテーションの準備と発表をさせた。
- 学生への負担が軽減するような提出課題を課すよう努力した。
- コロナ禍であったが、うまく対応し、実習を行うことができた。
- コロナ禍であったが、うまく対応し、講義を行うことができた。
- 実例を上げながら、面白く、分かりやすく授業ができた。
- 今年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで講義を実施した。・工業力学Ⅱと工業力学演習Ⅱは、一体で運営し、工業力学Ⅱに合わせ、工業力学演習Ⅱで演習問題を解かせる。・こうした授業形態をとりつつ、科目の学習内容への理解に努めている。
- 前回の演習科目解答の説明を講義に含め、講義内容の理解に努めた。
- 成績評価は全講義の出席を必須としており、オンライン講義でも出席率は高い。
- 関連事項の説明や課題の提示を、概説の時間や、オンライン講義のグループワークの際などで行った。
- 実験の際、参考書などを確認しながら、観察結果や実験データをまとめ、互いに検証させ、講義への理解を深めさせた。

- 実験毎のレポートは、書式の順守、考察、結論の妥当性と独自性を評価している。
- 個別に提示した実験課題についてのプレゼンテーションを、Microsoft Teams 上で
行い、オンラインシステムを踏まえた情報発信能力、コミュニケーション能力を養
い、実験の発展的な理解に努めさせた。
- 今年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで講義を実施した。
- 講義毎に課題を提示し、次回の講義で解答・解説し、講義内容への理解が深められ
るように努めている。
- 創造工学演習において、対面とオンデマンド混合授業をすすめることができた。
- 新カリキュラムの科目を新しく開講することができた。
- 実際に実験を行うことであるが、コロナ禍のため対面での実験は実施できなかった。
- より専門性の高い内容を実用問題への応用を交えながら講義するよう心がけた。
- 自己学習を促すため、ほぼ毎回の講義時に、時間外学習としての演習を課した。
- オンラインだったので、実際に実験しているところを動画に収めてなるべくわかり
やすく、理解してもらえるように心がけた。
- オンラインで理解しているか不安だったので、問題演習を多めにした。
- オンラインだったので、機械分野での内容について簡単な実験を動画に含めて興味
を持ってもらえるように心がけた。
- 後学期も前学期と同様にリモート授業を実施した。映像資料を用いるオンデマンド
授業としたが、適切な映像資料を提供できたと考えている。
- オンライン方式を基本とし、実習系の講義ではハイブリッド方式を採用した講義を
行い、学習効果の低下を防ぎつつ講義の質を保てるよう配慮した講義を実施した。
- オンライン方式では学生も気軽に質問できるようで、Microsoft Teams のチャット
機能などを用いて頻繁に質疑対応を行うことができた。
- 前期のオンデマンド動画での反省をもとに、より良い資料作成および説明ができた。
- オンラインと対面のハイブリッド形式で実施した。
- 三密を避けた対面での作業、理解度を高めるための Microsoft Forms を用いたレポ
ート提出。インカム、ヘッドセットを用いたライブ授業を実施した。
- 流体の基礎的事項から具体的な工学系の応用まで学習内容と関連させながら講義を
行い、数回の演習課題により講義内容の十分な理解と修得を目指した。
- 受講者の自主的な学習と理解を促し、流体力学の知識を習得させることを目指した。
- 各種数学的解法の数値的な計算法について基本原理の説明に加え適宜演習を挟みな
がら講義を行い、内容の十分な理解と修得を目指した。機械工学の専門科目との関
連性について説明を加え、学生の学習意欲の向上に努めた。

【電気電子工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。

- 全面オンライン授業化に伴い、講義動画の作成、講義資料のホームページでの公開

を行った。(教授、准教授、助教)

- オンラインツールを活用して同時中継による授業を行った(教授、准教授、助教)。
- 学生実験のオンラインでの対応を急遽検討することになり大変苦勞した。オンライン教材を作成するにあたり、できるだけ実験内容が体験・確認できるように、エクセルを用いたシミュレーションができるようにして学生に配布した。オンデマンドの講義画像でも、シミュレーションの使い方も説明し、課題を課した。(准教授)
- 毎回演習問題を課して、次週に解説を行うことにより、学生の基礎学力の向上を行った。Microsoft Forms を駆使してクイズ形式で問題に答えるようにし、学生に参加しやすい環境を提供した。(准教授)
- 本学で得られた研究成果及び最先端の研究動向を講義に取り入れた。(教授)
- オンラインミーティング等を活用し、ゼミを継続して実施した。(教授、准教授)
- 対面の実験とオンデマンドでの動画視聴の両方で実施した。対面の実験は、一人での実験を実施したため、教育効果は高かったと評価できる。(准教授)
- オンデマンド方式で講義実施後、学生の意見を収集し、翌週の講義動画に反映させることで、意見集約に時間を要したが、学生の様々な意見を紹介することができた。(准教授)
- オンデマンド講義を中心としたが質問箱を設け、わからないところに答える形式で、Live でも講義を行った。(准教授)
- 学生実験を対面とオンデマンドのハイブリットで行うことで、感染予防と対面での学習の機会の増加の両立を図った。(准教授)
- 図や写真を多用し、わかりやすい内容を心掛けた。また、演習、課題等により理解が進むよう努め、また参考文献を提供し自学を促した。(助教)
- 対面実験の実施が大幅に制限された一方、これを補うために今回初めて行ったオンライン課題ではシミュレーションを取り入れるなど内容を工夫し対応した。対面実験では、常時換気のもと参加人数を抑えるなど感染予防に努めながら実施し、受講者に実験実施機会を提供することができた。(助教)
- 講義動画を日本語版と英語版の両方を作成することで、日本人、外国人留学生の双方が深く理解できるように努めた。(教授)

【都市工学部門】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されている。本年度はコロナ禍におけるオンライン授業に関する対応とその効果に関するものが多い。

- オンライン授業の実施を工夫し、アンケート等を用いて学生からの意見や質問などを受け付けて授業改善を行い、学生のフィードバックを確認しながら改善効果の評価した。(准教授)
- オンラインでの講評会、ハイブリット型の講評会では、積極的に建築設計実務を行う建築家を招待し、オンラン講評会を実施するなど、オンラインならではの授業体

制に努めた。(准教授)

- インターフェイス科目「地域創成学Ⅲ」に取り組み、嬉野市等を対象としたプログラムを構築、実施した。大学院「地域デザイン特別演習」では、地域連携の対象でもある有田に関わる事象をテーマとし、他教員とも協力して演習課題の設定、実施し、また現地でも発表会等を実施した。(准教授)
- 進行シラバスを修正し、公開した。コロナ禍で進んだオンラインシステムを積極的に採用し、eラーニングも含めた授業改善を行った。その結果、学生の評価が上がった。(教授)
- 講義資料を点検し、内容の追加などを行った。特に、殆どがオンライン講義だったので、映像資料の追加を中心に行い、講義資料の充実化をした。開講後には学生のアンケートに基づいて資料の修正、改善をした。(講師)
- オンラインと対面のハイブリッドで授業を実施した。数値シミュレーションや計算問題の演習はオンデマンドで、実験は対面で実施した。数値計算についてはオンラインよりも対面の方がより教育効果があると感じた。(教授)
- オンラインライブ授業とし、TAをチーム内でチャンネルに分けて、指導するシステムの構築を試みたが、演習の進行状態の把握が難しく、対面解禁後は、授業をオンデマンド配信し、学生には投稿させたいうで小テストを対面実施する方法に変更した。(教授)
- 全員の設計課題の進捗を確認、意見交換を行った。対面では個別指導を行うことが多いが、オンラインだとその個別指導を全員が視聴している前で出来るため、リアルな模型を見れないもどかしさはあったがある面ではメリットでもあった。また、遠方のゲストをオンラインで招聘して、レクチャーや講評会に参加いただいたが、これもオンラインのメリットであった。(准教授)
- 授業ごとにホームページを設け、シラバスと配布資料、課題やレポートの解答例等を、ホームページを通じて情報を開示することにより、受講生にとって理解を深めることにできた。(准教授)

3.1.3. 教育研修・FDに関する事項

教育研修・FDについて、理工学部各部門の教員は次の活動を行っている。

【数理部門】

- 理工学部 FD 講演会 「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」(教授、准教授)
- 全学教育機構 FD 講演会 「第2回オンライン授業実施のための研修会」(教授)
- 全学教育機構 FD 講演会 「オンライン授業の実施に伴う、関係ツールの活用方法についての研修及び個別相談」(教授)
- 簡易版 TP 更新ワークショップ (教授)への参加が報告されていた。

【情報部門】

- 佐賀大学 FD・SD 講演会（教授、助教）
- 理工学部 FD 講演会（教授、准教授、助教）
- 佐賀大学 TPWS（教授、准教授）
- TP 研究会（教授）
- 「教育機関における著作権の基礎と応用」（教授）

【化学部門】

- 理工学部 FD 講演会「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」（化学部門 長田聡史 教授、化学部門 矢田 光徳 教授）
- 理工学部 FD 講演会「教育機関における著作権の基礎と運用」
- PROG 分析による FD 講演会
- ダイバーシティ学習プログラム～無意識のバイアス編～（e-ラーニング）
- 科研費獲得に向けた講演会
- クラウドファンディングに係る遠隔講演会
- Cisco Webex を使ったオンライン講義の開き方
- 公正な研究活動の推進に関する FD 講演会
- 2020 年度情報セキュリティ講習会～標的型攻撃メール対応訓練フォローアップ～
- オンライン授業の実施に伴う関係ツールの活用方法に関する研修会
- オンライン授業研修会（Microsoft Teams の利用、Webex Event を利用した講義の方法編）
- 令和 2 年度佐賀大学シンポジウム「ダイバーシティ定着のために-無意識バイアスについて考える-」
- 肥前セラミック研究センター第 1、2 回 FSDS 研修会

【物理学部門】

- 全員が簡易版ティーチングポートフォリオ(TP)を作成しており、一部の教員が標準版 TP を作成している。
- 理工学部 FD 講演会に参加した（教授、准教授）。
- 大学が開催する FD 講演会に参加した（教授、准教授）。
- 韓国延世大学とのパートナーシッププログラムにおいて中心的な役割を果たし、大学院生向けに講義を行うとともに、参加者と学術交流をはかった（准教授）。

【機械工学部門】

- 部門内に設置した教務・JABEE グループによる JABEE 基準適合対応、学部および大学院の教務関連事項の検討
- 学部 FD 講演会への参加
- 大学 FD 講演会への参加

【電気電子工学部門】

- 電気電子工学部門 FD 講演会「遠隔講義の質向上に関する講演会」（教授、准教授、

助教)

- 電気電子工学部門 FD 講演会「オンライン授業の実践例」(教授、准教授、助教)
- 理工学部 FD 講演会「ティーチングポートフォリオを利用した教育改善」(教授、准教授、助教)
- 情報セキュリティ SD 講習「2020 年度情報セキュリティ講習会～標的型攻撃メール対応訓練フォローアップ～」(教授、准教授)
- FD・SD 講習会「教育機関における著作権の基礎と運用」(教授、准教授)
- Webex 研修会(初級、中級編)(准教授)
- オンライン授業(Cisco Webex)の導入説明会(教授、准教授)
- オンライン授業のための「Microsoft Teams」FD 研修会(教授、准教授)
- 学生向け PROG テストの解説会(准教授)
- 科学研究費獲得に向けた講演会(教授、准教授)
- 起業家育成に関するFD講演会について(教授、助教)
- 研究力向上セミナーPART I「科研費制度改革・新様式に対応した申請戦略」(准教授)
- 研究力向上セミナーPART II「ポイントで学ぶ英語論文セミナー(基礎編)」(准教授)
- 研究力向上セミナーPART II「ポイントで学ぶ英語論文セミナー(応用編)」(准教授)
- 研究力向上セミナーPART II「ポイントで学ぶ英語論文セミナー(実践編)」(准教授)
- 公正な研究活動の推進に関するFD講演会「研究は誰のため？」(教授、准教授、助教)
- 寺本理事による説明会「共同研究に係る間接経費の見直しについて」(教授、准教授)
- 女性研究者の公平な昇任昇格制度改善プロジェクト報告会・ワークショップ(教授)
- 第1回オンライン授業研修会: Webex Event を使ったオンライン講義の開き方(中級編)(准教授)
- 第2回オンライン授業研修会: Cisco Webex を使ったオンライン講義の開き方(初級編)(准教授)
- 令和2年度ダイバーシティ推進室シンポジウム「ダイバーシティ定着のために「無意識バイアスについて考える」」(教授)
- 第2回肥前セラミック研究センターFD・SD研修会(助教)
- 総合分析実験センターのFD・SDセミナー(免疫組織染色の基礎知識と関連製品)(准教授)
- 本庄キャンパス共用設備利用者ミーティング(准教授)
- 情報処理学会全国大会 コロナ新時代の情報処理(教育) 高等教育におけるニュー

ノーマルの模索（准教授）

- 第23回関西大学FDフォーラム（准教授）
- 名大高等教育研究センター第184回招聘セミナー（准教授）
- 3D解析ソフト「VGSTUDIO MAX」webトレーニング・セミナー（准教授）

【都市工学部門】

- 専攻内でのFD活動の他、工学系研究科FD報告会（教授、准教授）、佐賀大学FD／SDセミナー（准教授）への参加が報告されていた。

3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項

オフィスアワーの設置と学生の訪問については、理工学部内の全ての教員が行っている。部門ごとの相談内容やその対応については、以下のとおりである。

【数理部門】

- 相談内容は学習方法や将来の進路に関するものが多い。（教授、准教授）

【情報部門】

- 年4回以上の面談を実施し、担当学生の就学状況や健康状況を把握。（教授）
- チューター面談をビデオ通話で実施するだけでなく、学期中もチャット等で適宜学生からの質問等に対応。（教授）
- 担当授業でのMoodle活用を推進し、大福帳を活用した学生とのコミュニケーション促進およびその結果に基づく授業改善。（准教授）
- オフィスアワーを設けるなど、学生からの学習・進路等の相談に対応。（准教授）

【化学部門】

- オフィスアワーは全教員が設定しており、学生の訪問に対応している。（教授・准教授・助教）
- オフィスアワー以外の時間においても、教員は学生の訪問・相談に適宜対応している。
- 学生からのメールによる相談についても対応している。
- 毎学期に担当学生全員に対し、ラーニング・ポートフォリオを活用したチューター面談を実施している。
- 学生の訪問・相談は、コース主任や教務委員、教育プログラム委員長、就職担当教員などに対するものが多い。
- 授業に関する質問が最も多く、その他履修上の相談や就職に関する相談・報告、進路等の相談など多岐にわたる。

【物理学部門】

- 成績不振者を学科全体で把握しチューターを中心に、学生（時には両親）と面接するなど、学生の学習体制の改善をはかり、留年率を下げるための努力に取り組んでいる。

- 進路不明者を出さないために、指導教員を中心に就職担当と協力し学生の就職、進学支援を行っている。
- 学生のオフィスアワーでの相談率は1割程度と低く、オフィスアワー制度があまり有効に機能していないように思える。ただ、大半はオフィスアワー以外での訪問をしている。

【機械工学部門】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。
- 相談内容のほとんどは就職・進路相談と学修相談についてであるが、一部の学生から日常生活に関する相談もある。

【電気電子工学部門】

- 相談内容は授業科目や試験関連、実験レポートの質問に関するものが多い。休学等の在籍についての相談もある。（教授、准教授、助教）

【都市工学部門】

- 各教員が設定した時間帯はもちろん、研究室学生については、適宜全教員が行っている。
- 相談内容は学修相談および進路相談に関するものが多い。
- 教職チューターによる学生面談や過年度生や学生保証人との面談なども随時実施されている。
- 面談方法は、対面、電話、資料送付など、できるだけ学生に寄り添えるように配慮されている。

3.1.5. 学生の受賞等

【情報部門】

- 情報処理学会九州支部奨励賞（指導教員：教授）

【化学部門】

- 令和2年度物理化学インターカレッジセミナー兼日本油化学会界面科学部会九州地区講演会 優秀口頭発表賞（指導教員：准教授）

【機械工学部門】

- 日本機械学会 畠山賞
- 日本機械学会 三浦賞
- 日本設計工学会 武藤栄次賞

【電気電子工学部門】

- 電子情報通信学会短距離無線通信研究専門委員会・短距離無線通信研究会 優秀学生賞（指導教員：教授）
- 電子情報通信学会通信ソサイエティ・ICETC2020 Student Presentation Award
- 電子情報通信学会九州支部・連合大会講演奨励賞（指導教員：教授）
- 映像情報メディア学会放送技術研究会・映像情報メディア学会学生発表優秀賞（指

導教員：教授)

- 電子情報通信学会九州支部・電子情報通信学会九州支部学術奨励賞（指導教員：教授）
- 電子情報通信学会九州支部長表彰・成績優秀賞（指導教員：教授）
- 理工学部同窓会長賞（指導教員：教授）
- 電気学会九州支部長賞（指導教員：教授）

【都市工学部門】

- 建築学会支部共通事業設計コンペ 全国審査優秀賞（指導教員：教授）
- 土木学会西部支部研究発表会 優秀講演賞（指導教員：教授）
- 建築学会 九州支部支部長賞（指導教員：准教授）
- 福岡デザイン・レビュー2021 JIA 卒業設計選奨（指導教員：准教授）
- 日本建築学会設計競技 全国入選 優秀賞（指導教員：准教授）

本年度は、新型コロナウイルスによる各種学会の開催中止が相次ぎ、学生による研究成果の発表の場が制限され、学生受賞件数に影響を与えた可能性は否定できないといえる。

3.2. 研究の領域

3.2.1. 著書、論文等の発表実績

過去5年間（2016.4.1～2021.3.31）の発著書、論文等の発表実績を表3.2に示す。

表3.2 過去5年間（2016.4.1～2021.3.31）の発著書、論文等の発表実績平均値

学科	職 種	著書	論文総数		和文原著		英文原著	
				査読付		査読付		査読付
数理部門	教 授	0.00	5.00	4.33	0.33	0.00	4.67	4.33
	准教授 (含講師)	0.00	2.33	2.17	0.00	0.00	2.33	2.17
情報部門	教 授	1.86	13.43	12.86	1.00	0.43	12.43	12.43
	准教授 (含講師)	0.00	20.50	16.67	5.00	1.83	15.50	14.83
	助 教	0.00	2.33	2.33	0.33	0.33	2.00	2.00
化学部門	教 授	1.73	14.64	14.27	0.73	0.45	13.91	13.91
	准教授	1.14	17.57	16.86	1.29	0.29	16.29	16.29
	助 教	0.00	4.67	4.67	0.00	0.00	4.67	4.67
物理学部門	教 授	0.40	6.60	6.40	0.40	0.40	6.20	6.00
	准教授	0.00	60.29	60.14	0.14	0.00	60.14	60.14
機械工学部門	教 授	0.78	20.89	19.56	2.11	0.78	18.78	18.78
	准教授 (含講師)	0.54	12.77	11.31	3.46	1.69	9.62	9.62
	助 教	0.00	2.00	1.67	0.33	0.00	1.33	1.33
電気電子工学部 門	教 授	0.56	20.33	20.11	2.44	2.22	17.89	17.89
	准教授 (含講師)	0.31	14.08	8.31	2.31	2.15	6.08	6.08
	助 教	0.50	9.00	9.00	3.00	3.00	6.00	6.00
都市工学部門	教 授	0.33	18.22	15.00	5.56	2.56	12.67	12.44
	准教授 (含講師)	1.00	11.40	6.30	8.90	3.80	2.50	2.50
	助 教	1.00	30.00	7.00	23.00	3.00	7.00	4.00

【数理部門】

- 教授の研究活動は平均的に見てかなり良好である。
- 准教授の研究活動は平均的に見て良好である。

【情報部門】

- 教授、准教授ともに、活発に研究成果発表を行っている。原著論文は、英文での発表が主要となっている。
- 助教の研究活動には、大きなばらつきがある。活発に研究成果発表を行っている者がいる一方で、極めて少ない者も見られる。

【化学部門】

- 教授の研究活動は良好である。従来よりも大学運営の負担増加にも関わらずに平均して良好な研究活動が維持されている。
- 准教授の研究活動は良好である。准教授の教育負担も確実に増加しているが審査付論文に約 16 報（5 年間）を報告している。
- 助教の研究活動は普通である。査付論文に約 5 報（5 年間）を報告している。

いずれの教員も審査付国際論文への投稿が大部分である。和文の論文は学会などから依頼された総説類と推察され、和文論文でも国内学会にはそれなりの貢献を果たしていると考えられる。昨年度と同様に本年度も准教授の論文数が教授よりも高く、研究活動他が高いレベルで維持されていることが判断できる。

【物理学部門】

- 教授の研究活動は個人差があるが、平均として高い水準にある。
- 准教授の研究活動は個人差があるが、高いアクティビティを示している。特に、准教授一名の大型共同研究論文（300 編以上）が論文数を押し上げている。
- ほとんどの論文が英文で書かれ、査読付きである。研究に関しては国際化が進んでいる。

【機械工学部門】

- 教授の研究活動は、概ね良好な研究活動が継続的に行われていると評価できる。
- 准教授の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。
- 助教の研究活動についても、概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。

【電気電子工学部門】

- 教授の研究活動は、博士後期課程学生の博士号認定資格を維持している。論文総数の平均は約 4.1 編／年であり、その 88.0%は英文論文であり、また英文論文のすべてが査読付きの業績であることから、質の高い研究成果を発表していると評価できる。
- 准教授の研究活動は博士前期課程学生の修士号認定資格を維持している。論文総数の平均は約 2.8 編／年である。教員により論文の発表実績のばらつきが大きい。
- 助教の研究活動は博士前期課程学生の指導資格を概ね維持している。論文総数の平

均は約 1.8 編／年であり、すべて査読付きであるとともに、66.7%が英語原著論文である。教員により論文の発表実績のばらつきが大きい。

【都市工学部門】

- 教授の研究活動は著書や査読付き論文で大きな成果を挙げている。ただし、毎年の傾向ではあるが、論文数の個人差が大きく、博士後期課程の指導学生数が多い教員に査読付き論文数が集中し、逆に博士後期課程学生のいない教員は留学生受け入れにも関係し、英文原著論文数よりも和文原著論文数がやや多い。
- 准教授・講師の研究活動は著書数および査読付き和文原著で教授をわずかに上回っている。教授同様、この表に示していないが、准教授・講師の論文数では個人差が大きい。
- 助教の研究活動は、現状 1 名のみなので、部門の傾向としてのコメントは差し控える。
- 全体として、昨年に比べ減少傾向にあり、特に英文原著に関しては、コロナ禍において、国際会議が中止になったケースが多かったことも影響していると考えられる。

3.2.2. 共同研究などに関する活動実績

【数理部門】

- 外国人研究者との共同研究（准教授）
- 国内の他大学の研究者との共同研究（講師）
- 共同利用・共同研究システムへの参画（教授）

【情報部門】

- 国立研究機関との共同研究（教授）
- 学内の研究プロジェクトへの参画（教授、准教授、助教）
- 学内進出企業との共同研究（教授）
- シンポジウム主催（教授）

【化学部門】

科学研究費補助金に新規・継続合わせて 11 件が採択されている。（研究代表者のみ）（教授・准教授）

民間企業や産業技術総合研究所等との共同・受託研究や寄附金が 14 件ある。

- 佐賀市（教授）
- 佐賀県窯業技術センター（教授・准教授）
- 産総研九州センター（教授・准教授）
- 九州大学（教授）
- 熊本大学（教授）
- インドネシア・スラバヤ工科大学（教授）
- インドネシア・ガジャ・マダ大学（教授）
- インドネシア・スリビジャヤ大学（教授）

- ・ インド・ガンジーグラムルーラル大学（教授）
- ・ ドイツ・ドレスデン工科大学（教授）
- ・ 韓国・大邱大学（教授・准教授）
- ・ 中国・遼寧大学（教授・准教授）
- ・ フランス・リール大学（教授・准教授）
- ・ 米国・オクラホマ州立大学（教授）
- ・ フランス・ブルゴーニュ大学（教授）
- ・ 中国・蘇州大学（教授・准教授）
- ・ 日本原子力研究開発（教授）
- ・ 民間企業（教授・准教授）

【物理学部門】

- ・ 九州大学との共同研究（教授、准教授）
- ・ 国際リニアコライダー計画の共同研究（教授、准教授）
- ・ 産総研との共同研究（教授）
- ・ 理化学研究所との共同研究（教授、准教授）
- ・ 佐賀大シンクロトンでの共同研究（教授、准教授）

【機械工学部門】

- ・ 国、独立法人、民間等からの受託研究（教授、准教授）
- ・ 国内の大学からの受託研究（教授、准教授）
- ・ 独立法人、民間との共同研究（教授、准教授、助教）
- ・ 国内外の大学との共同研究（教授、准教授）
- ・ 民間、財団法人等からの教育研究助成（教授、准教授、助教）

【電気電子工学部門】

- ・ 民間企業との共同研究（教授、准教授、助教）
- ・ 産総研との共同研究（准教授）
- ・ 佐賀県との共同事業（教授）
- ・ 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構からの受託研究（教授）
- ・ 国立研究開発法人科学技術振興機構からの受託研究（准教授、助教）
- ・ 国立大学法人東海国立大学機構からの受託研究（教授）
- ・ 独立行政法人国際協力機構 ABE イニシアティブ受入（教授）

【都市工学部門】

- ・ 研究代表者として令和3年度科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般）に採択された。（准教授）
- ・ 科研費については、基盤 B、挑戦的研究（萌芽）が継続で、新規に特別研究員奨励費、国際共同研究加速化基金（B）に採択された。（教授）
- ・ 研究代表者として、科研費（C）を継続実施中（2019～2021年度）である。（教授）

- 研究代表者として科研費基盤研究 (C) を継続した。また、研究分担者として新規に科研費基盤研究 (C) に応募し採択された。研究分担者として研究助成 (河川基金助成事業 (公益財団法人 河川財団)) が採択された。(准教授)
- 大林財団に採択された。(教授)
- カセサート大学と協力し、共同研究の研究成果を審査付き論文集へ投稿した。(准教授)
- 長崎大学、企業 (2 件) 等の受託・共同研究を実施した。(教授)
- 大学間の横断的な研究プロジェクトとして、文部科学省の気候変動適応技術社会実装プログラム (SI-CAT) および、佐賀大学を中心とする「有明海地域共同観測プロジェクト (COMPAS)」に参画して、共同研究を実施した。(准教授)
- インドネシアの 3 大学との国際交流を基に、国際共同研究の申請を実施した。(准教授)
- 民間等の受託研究 (高橋財団) の代表として、在来知歴史学また中国との学術交流活動を予定していたが、コロナ禍により日中シンポジウムは延期となった。オンライン会議などで交流は継続でき、次年度実施に向けて準備した。(准教授)
- 産廃物の有効利用に関する研究で共同研究 ((有)福嶋窯材) を行った。(講師)
- 佐賀大学プロジェクト研究所 ICT まちづくりデザインプロジェクト、地域連携プロジェクト・鹿島プログラムを主宰した。(教授)
- 共同研究 1 件 (嬉野)、受託研究 1 件 (肥前浜宿水とまちなみの会) を受け入れ、外部組織との関係強化に取り組んだ。(教授)
- 理工学部内の横断的研究組織「再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム」において、未利用熱利用空調システム研究分科会を開設し、佐賀県ならびに関連企業と共同で研究活動を行った (教授)
- 令和 3 年度から 3 年間の予定で新しく SDGs プロジェクト研究所地域防災減災研究プロジェクトを立ち上げることとなり、プロジェクト長を務めることとなった。(教授)
- 協和製作所との共同研究を実施した。(教授)
- 佐賀県果樹試験場の熱環境調査の研究も新たに始まり、農学という他分野での研究に取り組めており、今後の展開が期待できる。(准教授)
- 佐賀県有明海沿岸道路整備事務所・受託研究の研究分担を務めた。(教授)
- 地域創成の拠点形成として、佐賀県基山町において空き家対策協議会委員・まちづくり検討委員、佐賀県景観アドバイザーなどをつとめた。(准教授)

3.2.3. 受賞等の実績

教員の指導による学生の受賞等は、3.1.5 に記載している。

【情報部門】

- ICSS2019 年度研究賞 (准教授)

- ・ 情報処理学会 ソフトウェア工学研究会 功績賞 (准教授)

【化学部門】

- ・ 令和元年度廃棄物資源循環学会論文賞 (教授)
- ・ 九州分析化学会賞 (教授)

【機械工学部門】

- ・ 日本冷凍空調学会賞学術賞 (教授)
- ・ 日本冷凍空調学会賞学術賞 (准教授)
- ・ JACM Fellows Award (准教授)

【電気電子工学部門】

- ・ Saga University Established Fellow (教授)
- ・ 英国物理学会 IOP trusted reviewer status 受賞 (教授)
- ・ 電気学会 2020年電子・情報・システム部門誌 優秀論文賞 (教授)

【都市工学部門】

- ・ グッドデザイン賞 2020 (准教授)
- ・ 第23回稲門建築会 特別功労賞 (奨励) (准教授)
- ・ 日本建築学会 建築九州賞 (作品賞) 佳作 (九州建築選 2020) (准教授)

3.3. 国際・社会貢献の領域

3.3.1. 国際交流実績

【数理部門】

- ・ オンラインによる国際研究集会において3度講演を行った (准教授)
- ・ 国外の研究者との共同研究 (教授、准教授)

【情報部門】

- ・ 交流協定校からの留学生受入 (教授)
- ・ 短期留学プログラム参画 (教授)
- ・ 国際会議運営参画 (准教授)

【化学部門】

- ・ The 10th International Conference of Muhammadiyah での招待講演 (教授)
- ・ The 5th Engineering Science and Technology International Conference での招待講演 (教授)
- ・ The International Webinar Series #1 of Institut Teknologi Kalimantan での招待講演 (教授)
- ・ The International Lecture of Department of Chemical Engineering での招待講演 (教授)
- ・ Guest Lecture Series (GLS) on Sustainable Development Goals での招待講演 (教授)
- ・ ICST 2020 (Web conf) での招待講演 (教授)

- Guest Lecture Series on Sustainable Development Goals (Web conf) での招待講演 (教授)
- 2020 3rd International Conference on Advanced Composite Materials への参加 (教授)
- カリマンタン工科大学 (インドネシア) からの学生の受入 (教授)
- ガジャ・マダ大学 (インドネシア) からの学生の受入 (教授)
- オクラホマ州立大学 (米国) の研究者との共著論文 (教授、准教授)
- 蘇州大学との交流 (准教授)

【物理学部門】

- 工学系研究科国際パートナーシップ開催 (教授、准教授)
- SPACE 留学生受け入れ (教授)
- 共同研究のための渡航 (教授、准教授)

【機械工学部門】

- 国際学会、会議の運営委員、実行委員など (教授)
- 海外研究者や留学生の受け入れ (教授、准教授)
- 国際会議における招待講演、発表等 (教授、准教授、助教)

【電気電子工学部門】

- 国際パートナーシップ教育プログラム (教授、准教授)
- IEEE WORLD CONGRESS ON COMPUTATIONAL INTELLIGENCE (WCCI) 2020 (准教授)
- The 27th International Conference on Neural Information Processing (ICONIP2020) (准教授)
- 35th AAAI Conference on Artificial Intelligence (准教授)
- The Sixth International Congress on Information and Communication Technology (准教授)
- Int. Conf. Sustainable Development in Technology for 4th Industrial Revolution (ICSdTIR-2021) (教授)
- 2020 Asia-Pacific Microwave Conference (APMC2020) 参加 (教授)
- 2020 International Conference on Emerging Technologies for Communications (ICETC2020) 参加 (教授)
- International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP2020) 参加 (教授)
- 47th IEEE Photovoltaic Specialist Conference (教授)
- 30th International Photovoltaic Science and Engineering Conference (PVSEC-30) (教授)
- IEEE World Congress on Computational Intelligence 2020 (WCCI2020) (准教授)
- 国費留学生 (教授)

- ABE イニシアティブ留学生（教授）
- 米国、中国等との共同研究（教授）

【都市工学部門】

- カセサート大学との共同研究による論文執筆（准教授）
- ウィーン工科大学の教員からの要請に応じて、オンラインでJAPARCHの国際セミナーに参加（教授）
- ASIAN 協働セミナーをオンラインにて開催（講師）
- 国際ジャーナル誌 Journal of Environmental Engineering and Science および American Journal of Science、 Engineering and Technology の編集委員（教授）
- マレーシア UTHM と共同でオンライン国際シンポジウムを開催（教授）
- 第9回アジア建築新人戦国際ワークショップにオンライン参加、新人選審査員（准教授）

本年度は、コロナの影響によって、国際交流実績が極端に少なくなっている。国際学会やセミナーなどはオンライン開催となったケースも多くあった。

3.3.2. 社会貢献実績

【数理部門】

- 論文査読（教授、准教授）
- アメリカ数学会レビューアー（教授）
- ジョイントセミナー講師（教授、准教授）
- オープンキャンパスでの模擬授業（教授）
- 他大学大学院での集中講義（教授）

【情報部門】

- 学会役員（教授、准教授）
- 国機関の委員長（教授）
- 全国組織の委員（教授）
- JABEE 審査委員長（教授）
- ジョイントセミナー講師（教授、准教授）
- ベンチャー企業（准教授）
- 自治体プロジェクトへの参画（准教授）
- 佐賀県組織アドバイザー（准教授）
- 佐賀県審議会等委員（教授）
- 政策立案への貢献（准教授）

【化学部門】

- 学会等の論文査読委員（教授・准教授・助教）
- 日本化学会九州支部 化学教育協議会（教授）
- 繊維学会西部支部 庶務幹事（准教授）

- 繊維学会秋季研究発表会 実行委員 (准教授)
- 日本分光学会九州支部 支部長 (教授)
- 佐賀エコプラザ運営委員会委員 (教授)
- 佐賀市環境審議会委員 (教授)
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn)評議会 (教授)
- *Bulletin of the Chemical Society of Japan* の編集委員 (教授)
- *Japanese Molecular Liquids Group*、Chair (教授)
- 中性子課題審査分科会委員 (教授)
- 九州シンクロトロン光研究センター県有ビームライン課題評価委員 (教授)
- 一般社団法人繊維学会 西部支部 支部長 (教授)
- 佐賀県窯業技術センター 研究評価委員 (教授)
- 九州ファインセラミックス・テクノフォーラム (教授)
- 致遠館高等学校スーパーサイエンスハイスクール事業「課題研究指導」(准教授)
- 高大連携事業「科学へのとびら」研究体験プログラム講師 (准教授)
- 佐賀県理科・化学教育研究発表会 幹事 (教授、准教授)
- 日本技術者教育認定機構 審査研修員 (教授)
- 九州錯体化学懇談会 審査研修員 (教授)
- 佐賀医師会立看護専門学校非常勤講師 (教授)
- JST 審査委員会委員 (教授)
- 鹿島市立七浦小学校における科学教室 講師 (准教授)
- 大町町立ひじり学園における科学教室 講師 (准教授)
- 伊万里市立松浦小学校における科学教室 講師 (准教授)
- 有田町立大山小学校における科学教室 講師 (准教授)
- 唐津市立長松小学校における科学教室 講師 (准教授)
- 佐賀医師会立看護専門学校 講師 (教授)

【物理学部門】

- 論文査読委員 (教授、准教授)
- 先端基礎科学次世代加速器研究会委員 (教授)
- 高大連携、ジョイントセミナーでの出前授業 (教授)
- ノーベル賞物理学賞の内容紹介の動画を公開 (准教授)
- 九州大・佐賀大 ILC 推進会議委員学宇宙を学べる大学 in Kyusyu の開催 (教授)
- 先端エレクトロニクス DAQ セミナー2020/ 総研大講義「計測と制御」講演 (准教授)
- 二国間交流事業 (准教授)
- 鳥栖市教育委員会教育委員 (教授)

【機械工学部門】

- 学会理事（教授）
- 学会評議員（教授）
- 学会校閲委員・編集委員・運営委員（教授）
- 学会九州支部理事・評議員・商議員・常議員など（教授、准教授）
- 研究会会長・幹事など（教授、准教授）
- 学会開催の実行委員・運営委員など（教授）
- 県審議会・連携会議委員会委員（教授）
- ジョイントセミナー（准教授）
- スーパーサイエンスハイスクールの講師（准教授）
- 科学へのとびら（准教授）
- 佐賀県ロボット研究会（准教授）
- 地域企業技術相談・勉強会（教授、准教授）

【電気電子工学部門】

- 科学技術専門家ネットワーク 専門調査員（教授）
- 電気学会九州支部 役員
- 日本表面真空学会 九州支部長（教授）
- 佐賀県内企業訪問と技術相談（教授）
- 企業の課題と状況相談（教授）
- プラズマ核融合学会九州沖縄山口支部 役員（教授）
- 電気学会論文委員会 編集委員副査（教授）
- 科学研究費委員会専門委員 第1-2段審査（教授）
- プラズマ核融合学会九州沖縄山口支部 役員・庶務幹事（教授）
- プラズマ・核融合学会九州・沖縄・山口支部 役員・庶務幹事（教授）
- 電気学会論文委員会 編集委員副査（教授）
- プラズマ・核融合学会 九州・沖縄・山口支部・支部長（教授）
- 電気学会計測技術委員会 1号委員（准教授）
- 再生可能エネルギー等イノベーション共創プラットフォーム(CIREn) 会長（教授）
- 佐賀県工業技術センター評議会 委員（教授）
- 佐賀県工業技術センター研究評価会議 評価員（教授）
- 佐賀県工業連合会工業大賞審査会 審査委員長（教授）
- 京都府立医科大学研修員（准教授）
- ポータブル光音響イメージング装置の開発（准教授）
- 日本表面真空学会 役員（教授）
- 応用物理学会 九州支部 理事・会計幹事（教授）
- 応用物理学会 代議員（教授）
- 日本生理学会・生理学エドゥケーター（教授）

- 佐賀県高等学校教育研究会工業部会・工業系高校学習成果発表大会 審査委員長（教授）
- 夢ナビ・工学ナビステーションでの工学系学部紹介（教授）
- 佐賀県スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員（教授）
- 佐賀県立致遠館中学校・高等学校学校評議員（教授）
- 「科学へのとびら」研究体験プログラム（准教授）
- 唐津東高校「ジョイントセミナー」（准教授）
- 夢ナビライブ 2020 での講義（教授）
- 佐賀県立致遠館高等学校 SSH リサーチセミナー（准教授）
- 佐賀県立致遠館高等学校 SSH 課題研究指導（准教授）

【都市工学部門】

- 低平地研究会の環境専門部会長（准教授）
- 国、自治体からの依頼で 15 件以上の審議委員会委員や技術指導等（教授）
- 佐賀県（4つの委員会）および国土交通省九州地方整備局からの委員等の協力依頼に応じた。（教授）
- オンラインシンポジウム「ジオラボ」講師（准教授）
- 土木学会令和元年 8 月佐賀豪雨災害調査団幹事（准教授）
- 土木学会令和 2 年 7 月九州豪雨災害調査団員（教授、准教授）
- 嘉瀬川・六角川・松浦川学識者懇談会（准教授）
- 九州地方整備局新技術活用評価会議（准教授）
- 城原川ダム建設事業費等監理委員会（共に国土交通省）委員（准教授）
- 佐賀県教育庁の令和 2 年度学校安全総合支援事業推進委員（災害安全担当推進委員長）（准教授）
- 土木学会 技術推進機構 土木技術者資格委員会委員（准教授）
- Journal of Disaster Research 査読員（准教授）
- 土木学会論文集 A2（応用力学）査読員（准教授）
- 土木学会 令和 2 年度西部支部研究発表会座長（准教授）
- 日本建築学会『建築雑誌』編集委員（准教授）
- 日本建築学会感染症対応建築計画WG（准教授）
- 佐賀市空家等対策協議会委員（准教授）
- 天草市景観審議会委員（准教授）
- 佐賀市中央大通り再生会議委員（准教授）
- 有田内山ランドデザイン検討委員会（准教授）
- 令和 2 年度大阪市立住まい情報センターシンポジウム招待講演（准教授）
- SCENE 振り返る都市（准教授）

- 第 95 回住総研すまいろんシンポジウム招待講演（准教授）
- 景観賞選考委員（准教授）
- 建築学会九州支部建築計画委員会委員（准教授）
- 建築学会九州支部災害委員会委員（准教授）
- 公共施設の基本計画策定委員（准教授）
- 都市計画審議会会長（准教授）
- 土木のイメージアップ連絡協議会幹事長（講師）
- 低平地研究会基盤整備部会部会長（講師）
- 土木学会選奨土木遺産委員会（講師）
- 環境省有明海・八代海総合調査評価委員会委員（教授）
- 佐賀県開発審査会委員（教授）
- 国土交通省九州河川技術懇談会委員（教授）
- 国土交通省六角川学識者懇談会委員（教授）
- (公社)日本水環境学会九州沖縄支部理事（教授）
- SAGA 健康省エネ住宅推進協議会（教授）
- 空気調和・衛生工学会九州支部の事業幹事（教授）
- 特別講演・フィールドワークの講師として佐賀県立白石高等学校で講演（教授）
- 佐賀県建設工事入札審査会委員（教授）
- 佐賀市公共事業評価監視委員会委員（委員長）（教授）
- 唐津市建設工事等入札監視委員会（教授）
- 佐賀県総合評価技術委員会（准教授）
- 国土交通省、Tec Doctor（教授）
- 佐賀の木・家・まちづくり協会幹事（准教授）
- 日本ヒートアイランド学会理事（准教授）
- 土木学会西部支部・幹事（准教授）

3.4. 組織運営の領域

【数理部門】

- 理工学部各種委員、部門内委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授）

【情報部門】

- 学長補佐（教授）
- 副学部長（教授）
- 学生補導（教授）
- 評価室員（教授）
- 他部局併任（教授、准教授）
- スマート化プロジェクト（教授）

- 数理・データサイエンス教育推進（教授）
- 「科学へのとびら」専門委員（准教授）
- 学部コース配属処理（助教）

【化学部門】

- 理工学部および先進健康科学研究科の各種委員の担当（全教員）
- 学長補佐（教育改革担当）（教授）
- 理工学部長補佐（企画運営委員会委員）（教授）
- 総合分析実験センター センター長（教授）
- 肥前セラミック研究センター センター長（教授）
- 肥前セラミック研究センター セラミックサイエンス研究部門長（教授）
- 安全保障貿易管理アドバイザー（教授）
- 理工学部・理工学研究科教育質保証委員会 委員長（教授）
- 先進健康科学研究科教育委員会 委員長（教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授・准教授・助教）

上記のように、各種センター長をはじめとして各種全学委員会委員長などの要職も務めており、組織運営に大きく貢献している。

【物理学部門】

- 理工学部・工学系研究科各種委員の担当（教授、准教授）
- 学科内の各種委員の担当（教授、准教授）
- 全学委員会の委員を担当（教授、准教授）
- 学部入学試験出題委員（教授、准教授）

【機械工学部門】

- 理工学部、理工学研究科、先進健康科学研究科の各種委員会委員を担当（全教員）
- 全学委員会委員を担当（教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

【電気電子工学部門】

- 学長補佐（教授）
- 全学教育機構高等教育開発室会議（准教授）
- 入試改革推進室会議（准教授）
- 全学委員会委員（教授、准教授）
- 学部長（教授）
- 副学部長（教授）
- 学部長補佐（教授）
- 理工学部組織運営委員会委員長（教授）
- 理工学部・理工学研究科・先進健康科学研究科の各種委員の担当（全教員）
- 部門関連各種委員（全教員）

- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）

【都市工学部門】

- 工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 全学委員会委員（教授、准教授）
- 専攻内教育システム委員会（教授、准教授、助教）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（准教授、助教）

基本的に、部門内教員全員は全学、学部、部門内のいずれかあるいは兼務で組織運営に関わっている。また、一部教員は学長補佐、学部長補佐、といった全学および学部の組織運営にも深く関わり、活動している。

4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度

教員の総合的活動状況として、教員個人から自己点検された評価の各領域における評価点ならびに達成度の最小値と最大値をそれぞれの部門の教授、准教授、講師および助教について整理したものが下記の表 4.1 である。

表 4.1 教員自身による自己点検評価（評価点ならびに達成率）

学科	職 種	教育の領域		研究の領域		国際貢献・社会 貢献の領域		組織運営の領域		総合 評価
		評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	
数理部門	教 授	3 - 5	60 - 90	2 - 4	35 - 80	1 - 3	10 - 70	4 - 5	70 - 95	3 - 4
	准教授 (含講師)	3 - 5	60 - 100	3 - 5	40 - 90	2 - 4	20 - 80	3 - 5	60 - 95	3 - 5
情報部門	教 授	4 - 5	80 - 100	3 - 5	60 - 100	4 - 5	80 - 100	5 - 5	90 - 100	3 - 5
	准教授 (含講師)	4 - 5	70 - 100	4 - 5	80 - 100	3 - 5	50 - 100	4 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	3 - 5	70 - 100	2 - 5	10 - 100	1 - 4	0 - 100	3 - 4	70 - 100	2 - 4
化学部門	教 授	3 - 5	60 - 100	2 - 5	50 - 95	2 - 5	50 - 100	3 - 5	60 - 100	2 - 5
	准教授	3 - 5	80 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	50 - 100	2 - 5	60 - 100	3 - 5
	助 教	2 - 4	40 - 90	2 - 3	40 - 50	2 - 4	40 - 80	2 - 5	40 - 90	2 - 3
物理学部門	教 授	3 - 4	80 - 90	3 - 5	50 - 95	3 - 4	60 - 90	3 - 4	70 - 90	3 - 4
	准教授	1 - 4	1 - 100	0 - 4	0 - 80	0 - 4	0 - 100	0 - 4	0 - 100	1 - 3
機械工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 110	3 - 5	60 - 100	4 - 5	70 - 100	4 - 5	80 - 100	4 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	3 - 5	60 - 100	2 - 5	40 - 100	3 - 5	60 - 100	3 - 5
	助 教	3 - 4	70 - 100	3 - 5	50 - 100	3 - 4	70 - 100	3 - 4	60 - 100	3 - 4
電気電子工 学部門	教 授	3 - 5	60 - 198	3 - 5	60 - 106	4 - 5	70 - 248	3 - 5	60 - 100	3 - 5
	准教授 (含講師)	3 - 5	70 - 100	2 - 5	35 - 100	2 - 5	40 - 100	3 - 5	60 - 100	2 - 5
	助 教	4 - 5	80 - 100	4 - 5	80 - 100	3 - 5	50 - 100	4 - 4	75 - 80	4 - 4
都市工学部 門	教 授	4 - 5	80 - 100	3 - 5	70 - 100	3 - 5	50 - 100	4 - 5	70 - 100	3 - 5
	准教授 (含講師)	4 - 5	70 - 100	3 - 5	60 - 100	1 - 5	30 - 100	4 - 5	70 - 100	3 - 5
	助 教	4 - 4	80 - 80	3 - 3	60 - 60	3 - 3	50 - 50	3 - 3	60 - 60	3 - 3

表中、例えば、評価点(3-4)は（最小値 3-最大値 4）であったことを表す。

【数理部門】

この表から、各教員は適正な自己評価を行っていると思われる。

【情報部門】

この表から、各教員が適切に自己評価を行っていると思われる。

【化学部門】

教員各自が評価した総合評価点ならびに達成率の一覧を表 3 に示す。達成率は年度初めの目標に対する実績を示すので、達成率と評価点は必ずしも連動するものではないと考えられる。例えば、高い目標値を設定したものの達成率が 100%でなくても、その実績が十分であれば評価点は高く評価したと考えられる。教員毎の判断基準が統一されていないので容易な判断はできないものの、全体的には厳しい環境の中で高い目標を掲げて積極的に挑戦していく姿勢を見て取れる。最後に、2020 年度は新型コロナウイルス感

染症によるパンデミックが研究、教育、社会貢献、国際交流のあらゆる面に影響したが、オンラインによる講義などに対して多くの教員が柔軟かつ適切な対応をしたことが評価される。しかし国際交流については人流が滞ったことから、その活動の低下が余儀なくされた。今後はコロナ禍においてどのように国際交流を促進するのが課題の一つになると考えられる。

【物理学部門】

この表から、教員はおおむね適切な自己評価を行っていると思われる。

【機械工学部門】

この表から、一部の教員においてはかなり厳しい自己評価領域があるものの、全体としては各教員がそれぞれの職分を考慮した適格な自己評価を行っていると考ええる。

【電気電子工学部門】

この表から、各教員は概ね良好な自己評価を行っていると思われる。

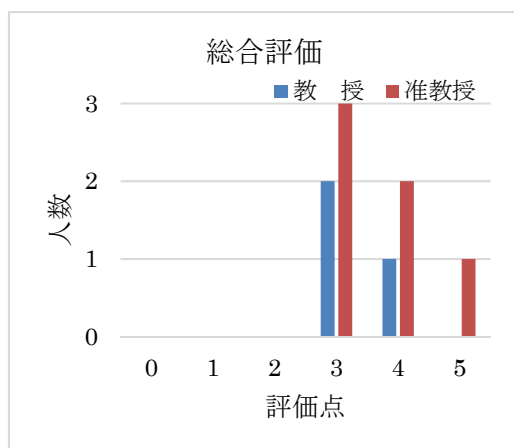
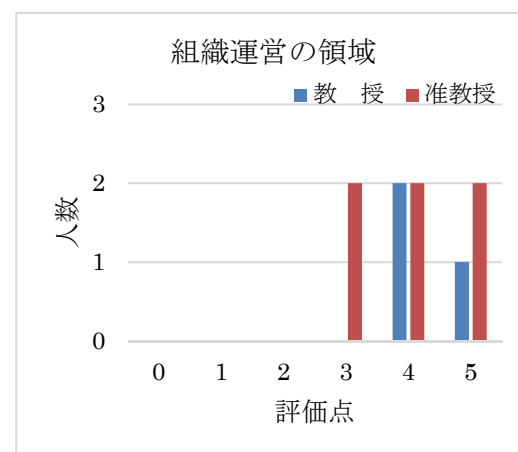
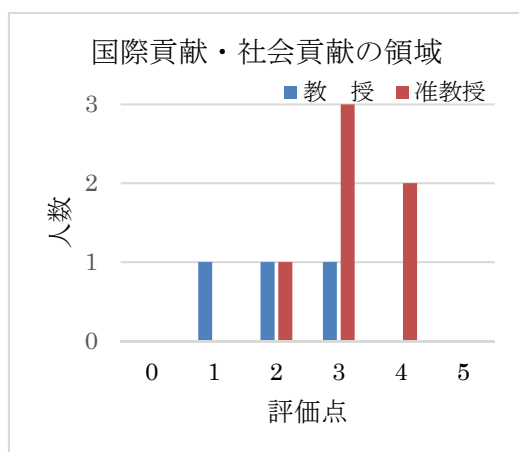
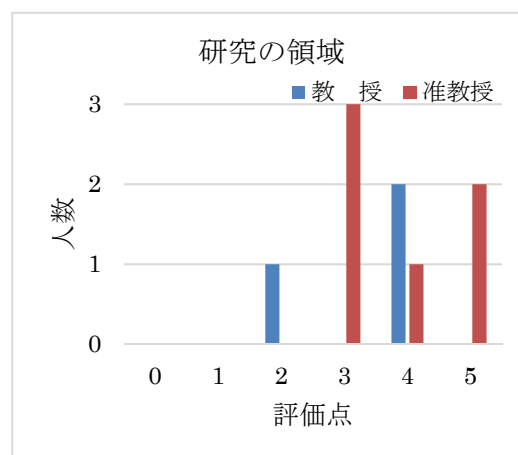
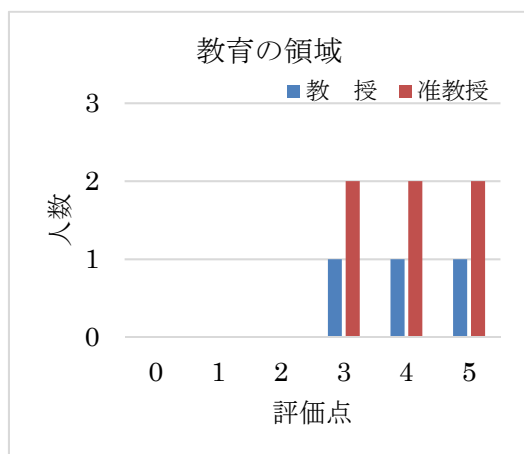
【都市工学部門】

個々人からの申告に基づくこれら自己評価について、実績とつき合わせる限り、各教員は厳格な自己評価を行っていると思われる。

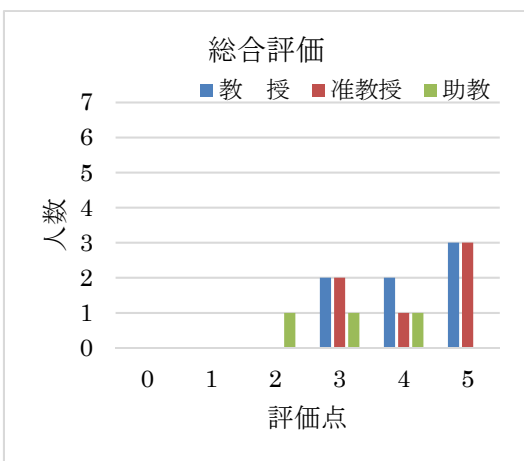
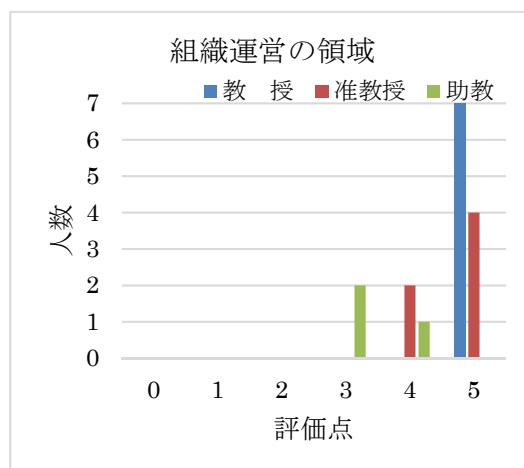
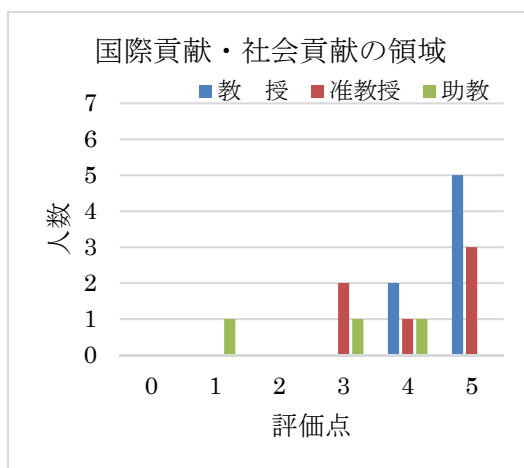
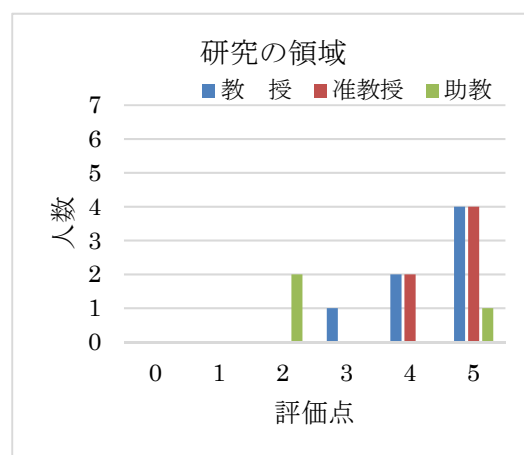
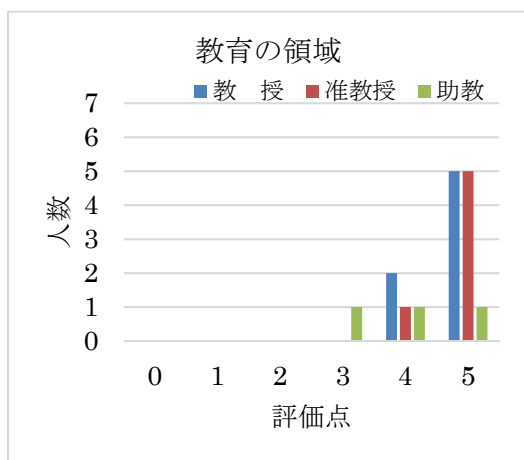
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム

以下の通り、部門毎に各教員が自己点検した評価領域に関する評価点のヒストグラムを示す。「准教授」は准教授と講師の合計を表す。

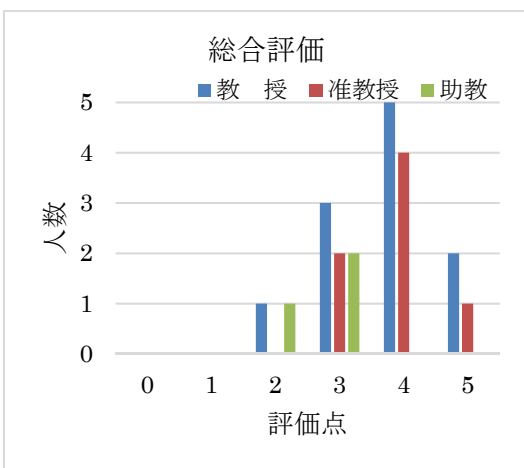
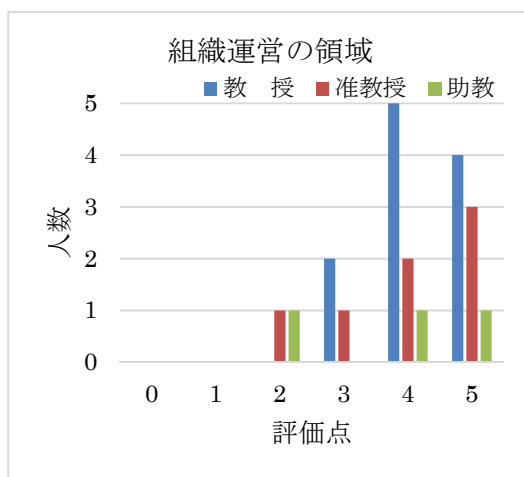
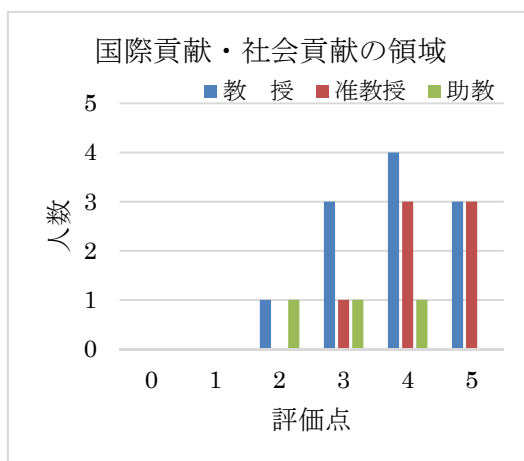
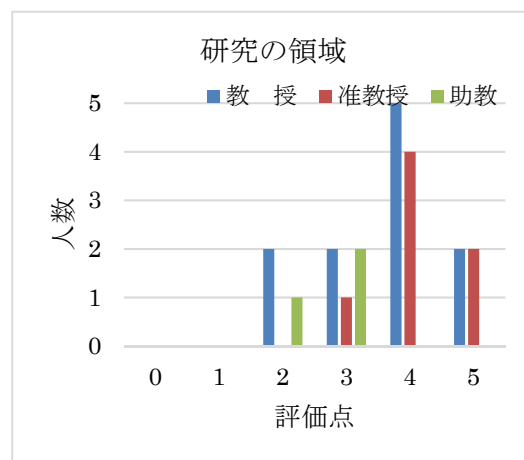
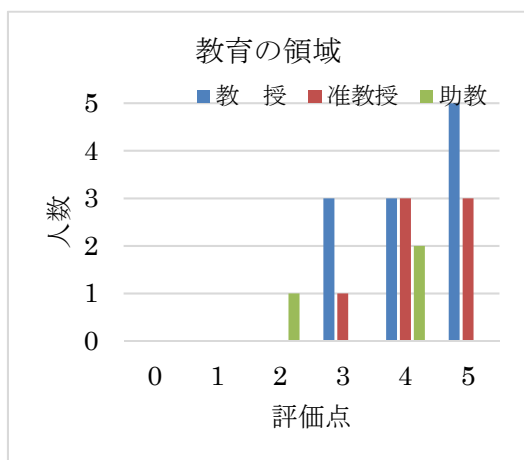
【数理部門】



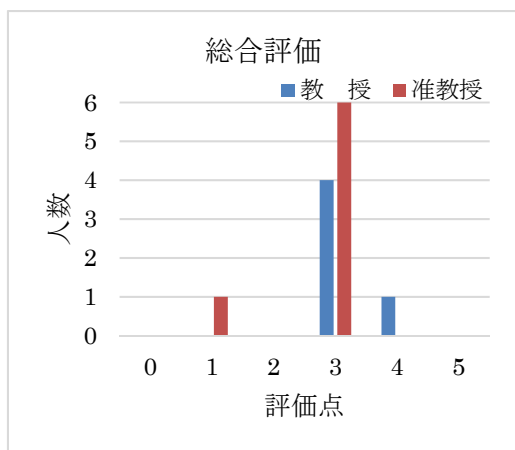
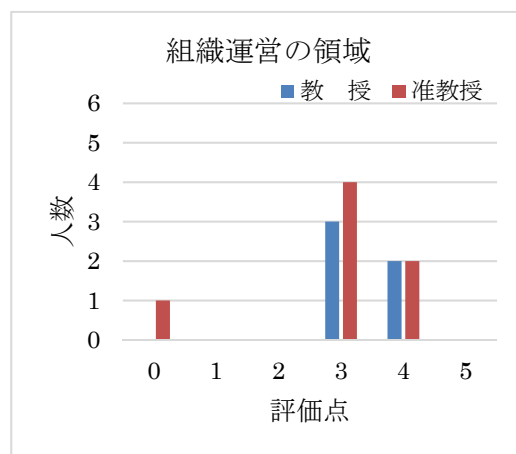
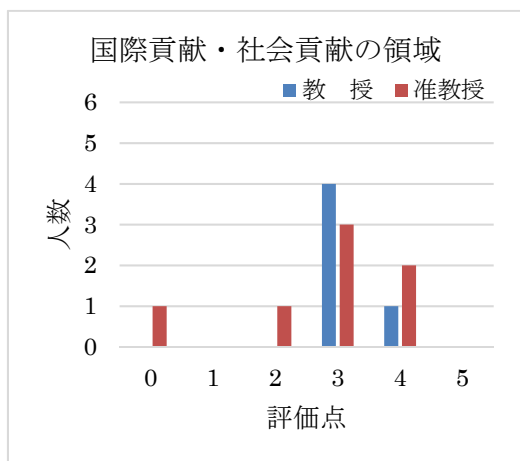
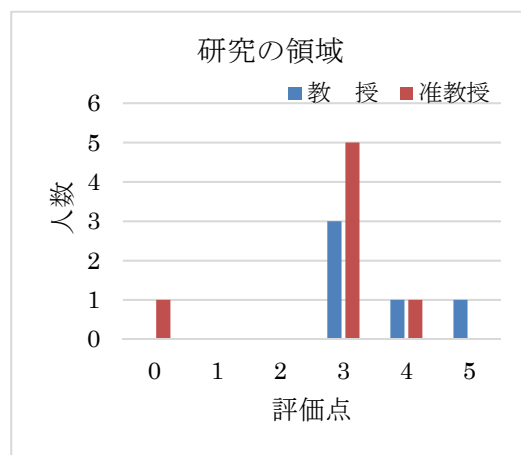
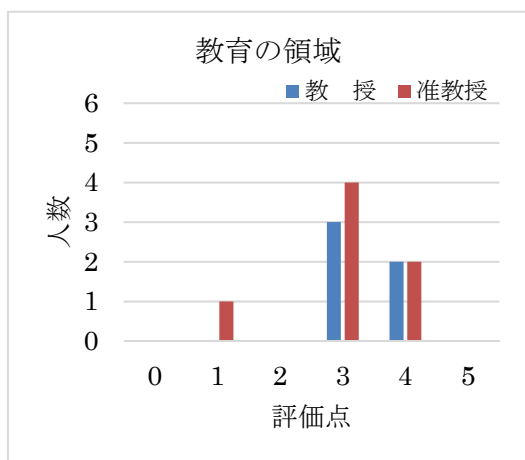
【情報部門】



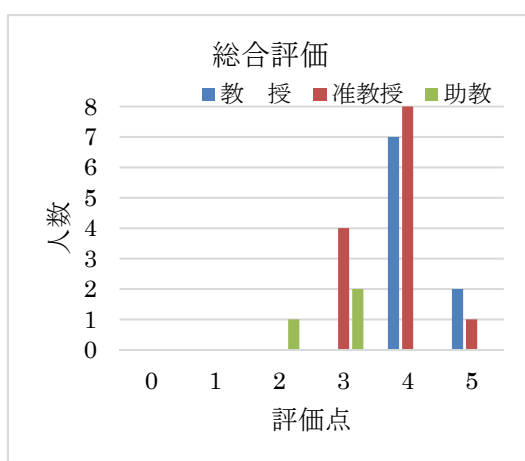
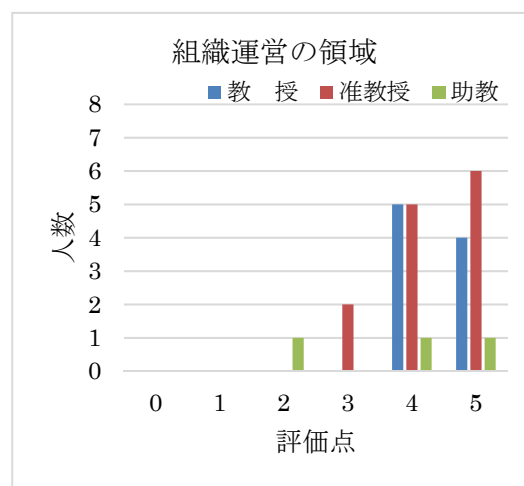
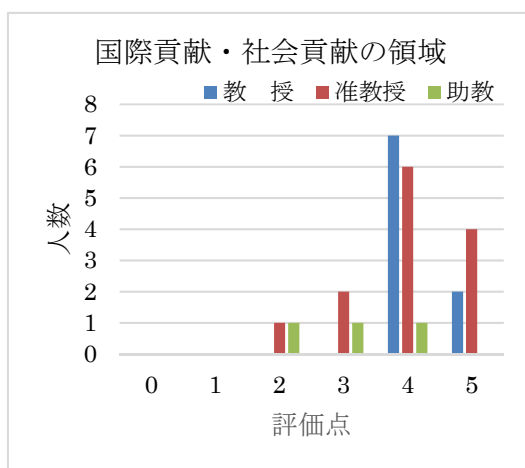
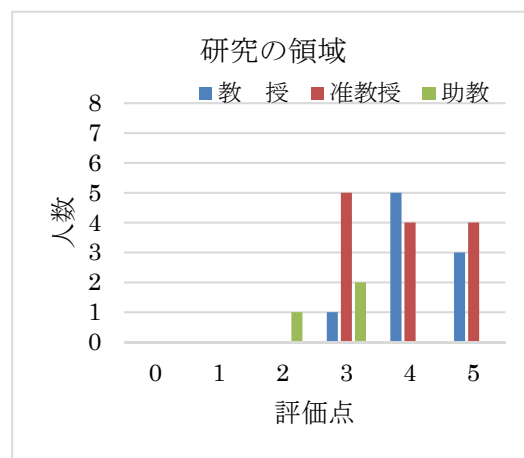
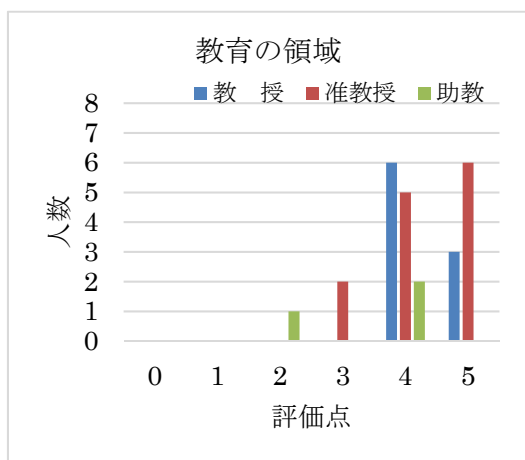
【化学部門】



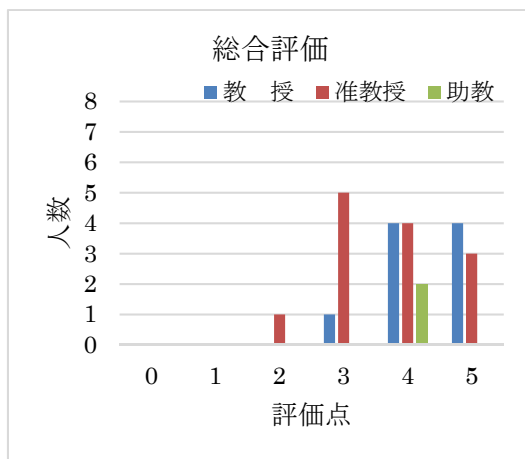
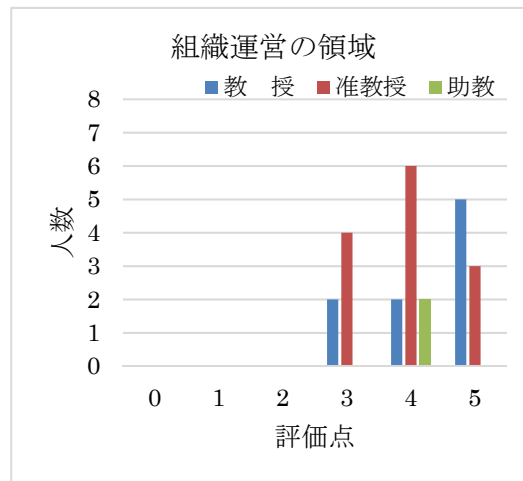
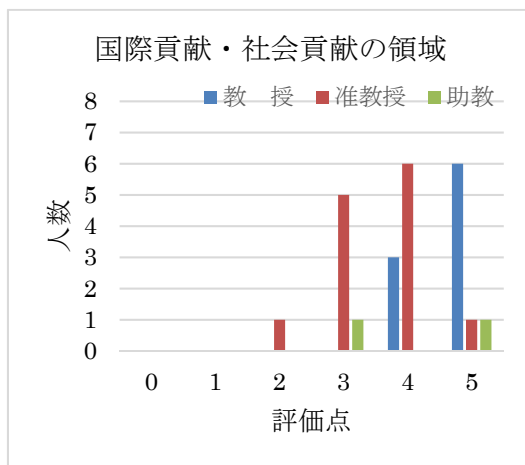
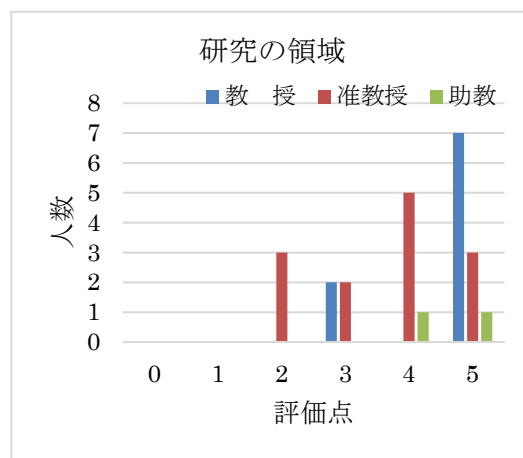
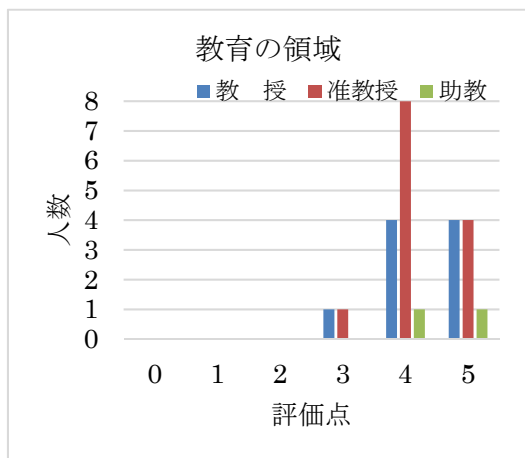
【物理学部門】



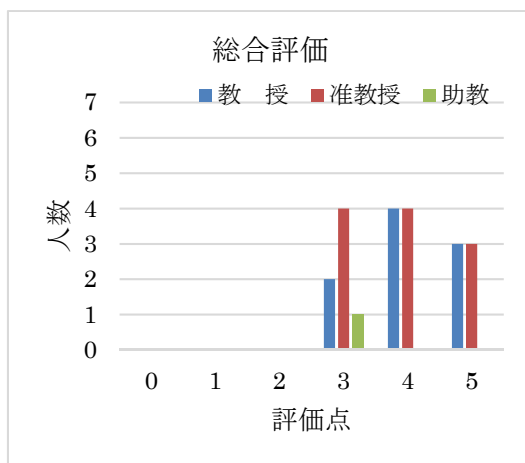
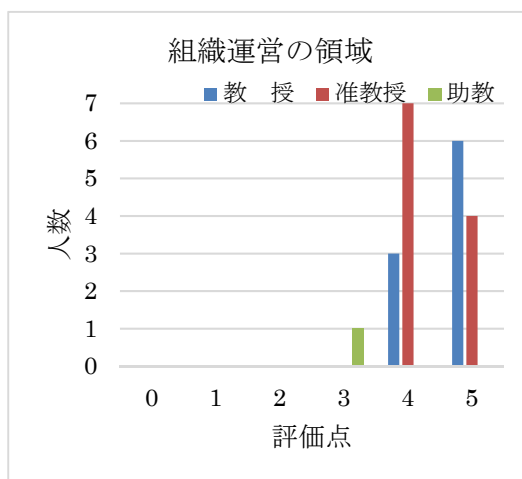
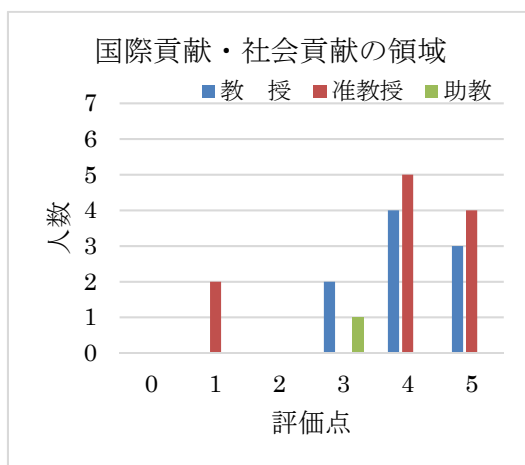
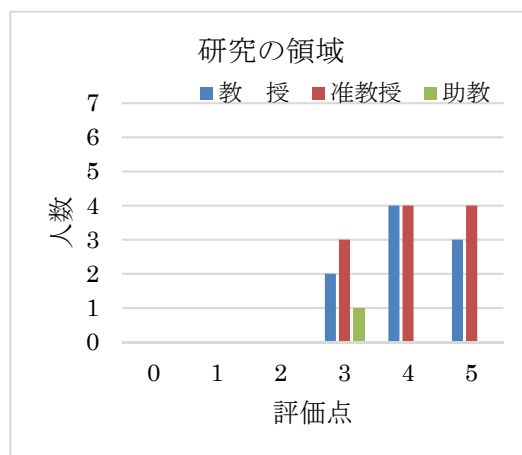
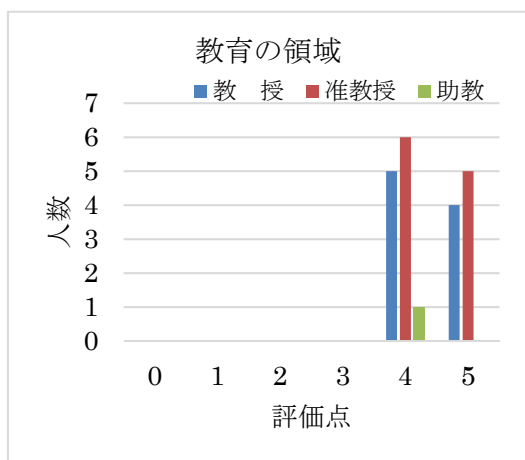
【機械工学部門】



【電気電子工学部門】



【都市工学部門】



4.3. 評価委員からのコメント

各部門の評価委員からのコメントを以下にまとめる。

【数理部門】

1. 各教員が真摯に研究及び教育活動を行い、高い科研費採択率、入試問題作成や共通教育などにおいて本学部・本研究科に貢献しているため、自己評価は妥当である。
2. 論文発表や国際研究集会への参加および講演など、研究面において質の高い貢献をしていると評価できる。
3. 以前よりも教員の教育および組織運営に関する負担は増加している。

【情報部門】

1. 新型コロナウイルス蔓延のため、2020年度の教育活動は非常に困難であった。その中で、情報部門としては、その専門性を活かして教育活動が実施できたことが伺われる。改組に伴う負担増にも対応しつつ、完成年度に向けて実施していく必要がある。
2. 研究活動は、活発であった。原著論文も、主に英語による発表が行われている。
3. 国際連携の領域では、コロナ禍のため留学生受け入れなどが困難であったが、継続しているプロジェクトでは成果があった。
4. 社会貢献の領域では、学会活動の他、国や県の委員会等への参画など、幅広い貢献があった。
5. 組織運営の領域では、他部局への併任、学内プロジェクトへの参画、法人活動への参画などがあった。

【化学部門】

1. 過去10年以上にわたって継続されたJABEE認定プログラムの「教育の質保証」の体制を受け継ぎ、応用化学コースと生命化学コースのいずれもPDCAサイクルに基づいた質の高い教育体制を維持している。
2. 大学院教育においては、博士前期課程のみならず、博士後期課程においても多くの日本人学生に加えて外国人学生に対しても指導しており、理工学研究科（工学系研究科）や関連する先進健康科学研究科の定員充足や活性化に寄与している。学生の教育・研究指導の成果は、学会でのポスター賞の受賞などに反映されている。
3. 研究においては、ほとんどの教員が査読付きの英文誌に論文発表をしている。発表論文の中にはインパクトファクターの値が極めて高い雑誌への発表も含まれており、質の高い研究が行われている。学会誌から依頼された総説・解説の和文もあり、その分野で脚光を浴びる成果が得られていると考えられる。
4. 外部資金獲得においては、科研費をはじめNEDO、JSTや民間企業と共同・受託研究の申請を精力的に行い、学内研究費の削減を補う努力をしている。このことから各教員の日々の努力を知ることができる。
5. 国際貢献について、2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で国際学会への参加・発表や海外の大学などへの訪問や海外の研究者の招聘などがほとんど停止に

なった。このため、例年に比べると低調な内容であったが、2020年度に関しては致し方ない状況であったと考える。

6. 地域貢献については、地域の研究アドバイザーとして講師を務める教員や、佐賀県や九州地区の理科教育への協力、佐賀地域の理科・科学振興のための事業への参画など、多くの教員が地域貢献に尽力している。しかし2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延が原因で中止になった行事などもあったが、致し方ない状況であったと考える。社会貢献としては、学会の主要な委員を務める、非営利団体と連携するなどして、学会活動等にも努めている。このように、国際・地域・社会貢献にバランス良く活躍しており、優れた貢献をしていると評価できる。
7. 組織運営については、全学、研究科、専攻において本部門教員は幅広く組織運営の責務を果たして活躍している。また重責を担う役職を担う教員もあり、その貢献度は極めて高い。一方で、その重責の責務の教員を部門全体で支える態勢が出来ていることも高く評価できる。

【物理学部門】

1. 前年度の2019年度から新教育課程が始まり、新たな共通専門基礎科目の担当と旧課程と並行して授業を提供することから教育に関する負荷が大きくなっている。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響で授業の方法が多様化・複雑化し、教育負担が増えている。
2. 各教員は、日常的なFD活動を継続し教育改善に取り組んでいる。また、演習問題の出題や中間試験を実施するなどの自学自習時間を増やす取組が行われている。
3. 研究活動については、概ね良好なアクティビティを維持していると思われる。教育研究費が不足している中、学生（院生）による学会発表なども定着してきており、研究の高いアクティビティが教育の活性化にもつながっている。
4. 社会貢献や国際交流等の活動も継続されている。また分野に偏りがあるが専門性を活かしてアウトリーチ活動にも貢献している。

【機械工学部門】

1. 教育に関しては、コロナ禍による急遽のオンライン教育の実施指示に対する教員の努力とオンライン教育での教育効果向上に対する各教員の努力の様子が見られる。機械システム工学科の教育プログラムは日本技術者教育認定機構のJABEE認定を受けており、コロナ禍においても教員の日々の創意工夫によって質の高い教育が保証・維持されている。個々の講義に関しては、改組によって、とくに学部共通基礎科目などで一部教員の負担が増える中、各教員が学科の目標に沿って学生を育成しようとする努力が見られる。

大学院教育では、講義での専門知識の修得に加えて、丁寧な研究指導による学生の能力の向上が図られている。英語による教育にも力が入れられ、オンラインによる大学院学生の国内外の学会での発表も多く行われている。

2. 研究に関して、国内外の学会などにおいて論文発表が精力的に行われている。研究費は、科学研究費補助金のみならず、企業との共同研究、奨学寄付金、財団からの研究助成などの受け入れ、NEDO などのプロジェクト研究についても積極的かつ継続的に取り組まれている。これらのことから、部門内教員の研究に対する国の機関や民間企業等の強い期待が伺われる。
3. 社会貢献・国際交流では、学会等の役員および委員会委員などの活動を行い、また講演会、研究会なども精力的に開催している。さらに、外国人研究者の受け入れや、国際会議においての情報交換も積極的に行っている。
4. 組織運営に当たっては、機械工学部門が担当となる研究科および学部、また部門内の様々な委員を全教員が誠実に努め、責務を果たしている。

上記(1)～(4)と自己評価結果を勘案して、全ての教員は各自の活動の自己評価を適切に行なっていると判断する。

【電気電子工学部門】

1. 教育の領域においては、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により講義を急遽オンライン化せざるを得なくなるなど非常に大きな影響があったが、そのような状況下でも部門内の教育に関連する委員会活動が活発に行われ、オンライン授業に関する情報共有が図られるなど、教育改善に積極的に取り組んでいる。また、講義のオンライン化にあたり教員それぞれが種々の創意工夫を行うことで困難を乗り越えてきたことが窺い知れる。また、卒業研究や特別研究での教育研究指導により、学会発表等において多くの学生が学会賞等を受賞している。
2. 研究活動においては、質の高い論文発表がなされ、共同研究も活発に行われている。また、研究に関する受賞も数多くなされている。教員ごとの研究活動のばらつきが大きい。
3. 国際交流においては、コロナ禍により学会の中止や延期などの影響を受け、前年度よりも件数は減少しているものの、オンライン国際学会への参加を中心として、共同研究も実施されている。社会貢献においては、学会役員、国際学会編集委員、論文編集委員、論文査読委員、高大接続事業、地域での科学実験講師など幅広い活動が行われている。
4. 組織運営にあたっては、学長補佐、学部長、副学部長、学部長補佐、理工学部組織運営委員長をはじめとして、全学委員、学部内委員、部門内委員ともに、着実に担当が遂行されている。
5. すべての領域において、良好な成果が出ており、教員それぞれが今後も継続的な向上に努めていただきたい。また、自己評価において、達成率が高い領域においては、より高い目標を設定し、達成率が低い領域においては、達成できるように努力していただきたい。

【都市工学部門】

1. 教育について

- 教授の教育負担で見ると、新カリキュラムの学年進行に伴って、学部の担当科目数、担当コマ数共に前年度（令和元年度）より、やや軽減した。
- 准教授（講師含む）の教育負担で見ると、前年に比べ、学部の担当科目数は増加しているがコマ数はやや軽減している。ともに平成30年度と比べ、やや軽減した。これも新カリキュラムの学年進行に伴って、サブフィールドPBLなど、多数の教員が参加するオムニバスまたはアクティブラーニング型の授業が増加したことによるものと考えられる。
- 卒研学生指導数は、教授・准教授ともに、前年度に引き続き、増加傾向を示している。これは、教員減と補充の無い状態が続いてきたことによるものといえる。
- 修士指導学生数は、教授、准教授、共に前年度より増加した。これは、修士課程入学者確保のための指導と広報を行ってきた効果の表れとも考えられるが、コロナ禍にあっても、特に土木関連業界への就職状況が好調であるため、今後も継続的に戦略を練る必要がある。
- 学生の授業評価を踏まえ、学生に分かりやすくする様々な授業の工夫が実践されており、総体的に授業方法の改善が図られていると考える。
- 改組2年目となり、全体の半数が新カリキュラムでの授業となったが、コロナ禍におけるオンライン授業がほとんどであったため、十分な検証と改善が困難な状況が続いている。
- 前学期は急遽、全科目がオンライン授業となり、5月頃までは、その導入にほとんどの労力を割かれることとなったが、各教員それぞれに工夫して対応していることが報告されている。

2. 研究について

- 研究に関する個人目標の達成度は、教授で84%、准教授（講師含む）で82%、助教で60%の達成率で、全平均では82%であり、総じて良好と評価される。一方で、研究の一評価軸としての論文数は、前年同様、教員個人間でばらつきが大きい。
- 前年度に比べ、教授の論文総数がかなり減少しており、これは、コロナ禍において管理運営業務等への負担が各段に大きくなったことが原因と推察できる。
- 研究活動の活性化のためには、授業負担、管理運営を含む雑務を効率化によって軽減することが必要であるが、これにも限界があるため、教員、技術職員を含めたスタッフの充実が急務であると考えられる。
- 共同研究では、国・県の自治体のほか、民間企業との間で研究費の獲得も含め、多種多様な形で取り込んでいる様子が伺える。
- 大学からの研究費が殆ど期待できない中、各自の研究を進めるための研究費獲得では、全ての教員が科研費をはじめ、各種財団等への申請・獲得に向けた活動を

実施しており、研究活動への自助努力が窺い知れる。一方で、大型予算獲得には個人研究では対応が困難となりつつあり、学内外の研究者との共同研究を進めるなどの努力が必要ともいえる。

- 近年の自然災害に対する防災・減災の地域ニーズを押し量り、2019年度末から部門内教授を中心に検討を進めてきた、学内の研究拠点化を念頭においた概算要求の申請準備を整えた。将来的には、旧低平地沿岸海域研究センターに代わる新たなセンター設置を目指した展開となることが期待される。
- コロナ禍によって、前学期中は多くの学会が中止となり、様々な業務が停止してしまったことが、論文数や受賞数の大幅な減の原因になったと考えられるが、後学期からは、オンライン国際学会等も多く開催されるようになり、この点に関しては次年度における論文数の回復も期待できる。

3. 地域・国際貢献について

- 多くの教員が行政などの各種委員会や審査会、講演会などを介して地域社会に貢献している。
- 多くの教員が国際的な活動に積極的に関わるとともに、外国から研究員、大学院生（留学生）の受け入れ、SPACE-E学生、海外大学での講義、及び国際的共同研究の実施により、国際学術交流を行ってきた。しかしながら、本年度はコロナの影響によって、人的な往来が全くと言っていいほど不可能となり、十分な成果があったとは言い難い状況ではあるが、後学期以降、オンラインによる国際交流のソースが各教員レベル、各分野レベルで立ち上がり、継続的に実施できる体制が整い始めたようである。
- コロナによって、留学生の入学者希望者数が激減し、令和3年4月度の博士前期課程、博士後期課程への入学者はわずか2名であった。また、SPACE-Eの入学者希望者の多くはオンラインを前提とした入学により、指導を受けることになった。
- 多くの教員が地域の要望に応じ、技術相談や技術移転に協力するとともに、共同研究に向けた取り組みを常に意識しているが、これもコロナによって一時期滞った。

令和2年度理工学部評価委員会委員

委員長	豊田 一彦	(学部長)
委員	後藤 聡	(副学部長・評議員：令和3年9月30日まで)
委員	佐藤 和也	(副学部長、評議員：令和3年10月1日から)
委員	皆本 晃弥	(副学部長)
委員	山西 博幸	(副学部長：令和3年10月1日から)
委員	小島 昌一	(教務委員会委員長)
委員	大津 康德	(教育質保証委員会委員長)
委員	梶木屋 龍治	(数理部門長)
委員	只木 進一	(情報部門長)
委員	海野 雅司	(化学部門長)
委員	河野 宏明	(物理学部門長)
委員	萩原 世也	(機械工学部門長)
委員	田中 徹	(電気電子工学部門長)
委員	帯屋 洋之	(都市工学部門長)
委員	横尾 寿人	(理工学部事務長)